onmyoninjaに出会うとき

吉吉雄雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｏｎｍｙｏｎｉｎｊａに出会うとき

【Ｎコード】

Ｎ５５４９Ｒ

【作者名】

吉吉雄雄

【あらすじ】

普通の高校生だった小早川俊介。

ある日、口裂け女に襲われ、忍者であり陰陽師という安倍剣に出会う。さらに特殊攻撃の使えない「魔法少女」ハルコに無理やりトレジャーハント同好会にいれられる…

笑いありバトルあり！

プロローグ「俺、普通の高校生なんです」（前書き）

初めての投稿です
長編物を作成してみたかったので、書いてみます。
長編小説なので失踪しないように努力はします（笑）

タイトルの通り、陰陽師と忍者が出てきますが、多々私の考えたむちゃくちゃな技が出てきます。そのときは「忍者」ではなく「Ｎｉｎｊａ」「陰陽師」ではなく「Ｏｎｍｙｏｊｉ」として見てください

誤字脱字があった際は、是非、教えていただけるとありがたいです。

また、こんなキャラ出してとか、こんなの書いてなんて来たら絶対書きます

プロローグ「俺、普通の高校生なんです」

読者の皆さんは憑き物や鬼などを信じているだろうか
信じてる人もいるし信じてない人もいるかも知れない（今現在襲われそうになっている人は済まない）
自分はいいものは信じたし、怖いものは信じなかった。
これからもそれでいいと思っていたが、そうはいかなくなった…
なんでかって？それは俺が陰陽師と忍者という奇妙な存在に出会ったから…

自分――小早川俊介は高校1年生だ。まだまだピチピチのチェリーちゃん、彼女募集中なんだが4月で高校に入ったばかりだというのに学校に残されてしまった。決して抜き打ちテストとか授業態度が悪かったわけではない。よくあるだろ？おせっかいな先生が「自己紹介カード」なんてものを配って趣味なんかを書く…それを教室の壁に貼ってたんだ。ただ貼るだけならまだしも、担任は相当几帳面なようで「そこはもうちょっと右に」なんてくるもんだ。
そんなこんなで時間は7時を回っていた。4月と言ってももうかなり暗くなっている。それに何故か寒い
「風邪でも引いたかな」
そんなことを呟きながら路地を歩いて行く。今日は脇道に入ってみようか、もしかしたら近道かもしれない。というか俺は何を言っているんだ…馬鹿は風邪を引かないだろ

なぜこんな暗い時に近道なんか探したんだろうと今ではずっと後悔している。そりゃこれだけ人のいる街でこんな時間、こんな人の少ない場所にいる人間なんか変人しかいないじゃないか。道中ずっと寒気は感じていた。俺は馬鹿だった。馬鹿は風邪を引かないんだ。

――私、綺麗？
かなりのんびりした声で女性が尋ねてきた。普通の女性だったなら「ええ、綺麗ですよ」とか「まあまあです」とか言えたかもしれない。だが声をかけてきた女性は帽子にサングラス、マスクという顔が全く確認できない恰好だった。その格好を見たときにとっとと逃げさればいいのに――逃げても逃げ切れたかわからなかったが――その女性をまじまじと見上げ…言ってしまった。このタイプには絶対に言ってはいけない一言を
「マスクを取っていただかないとなんとも言えません」
前言撤回だ。おそらく自分は病にかかっていた。それも重病だ。そうだと信じたい。信じさせてくれ。だが、言ってしまったことは仕方がない。女性はさっとマスクを外した。このセリフを待っていたと言わんばかりに口を吊り上げ…吊り上げすぎだ。俺は見てしまった…夜に知らない人はいないと言われるほどの有名人「口裂け女」だ。耳たぶまで口が開いている。その顔を見た瞬間俺は呆然としていた。漏らさなかっただけよしとしよう。そのまま俺を押し倒し
「これで綺麗って言える？ねぇ！ねぇ！」
この時コンペイトウを持ってポマードと3界唱えればそれでことは終わったかもしれないが、実際にあってみるとそんな余裕はないね。痴漢にあったときに声が出せない理由もわかるよ…
口裂け女は俺の腕を掴んで地面に押し付けている。マスクかなんかをかぶった変質者じゃないのか？握力強すぎだろこの女！とにかく無理矢理に拘束から逃れようとするが、それもあえなく失敗し、また質問された
――ねえ、私、綺麗？
ここで「綺麗です」と答えれば「これでも？」とかいって追いかけて殺されるんだったかな？逆の回答をしても殺されるんだったな…なんで怪物っていうのは極端なのかね。
ここは答えないのが一番だと決め込んだ俺はとにかく拘束から逃れようと必死でもがいたその間に3回くらい同じ質問がされた。だ

が向こうもしびれを切らしたのだろう
「次答えなかったら殺す」
俺は焦ったね。どう考えても俺は殺されてしまうじゃないか。ほんとに頭の血管がプッツン逝っちゃうんじゃないかというほどに手に力を入れたね。でも駄目だった。漫画や小説に出てくるスーパーマンやスーパーウィメンたちがどれだけすごいか思い知らされたよ。
「臨兵闘者皆人列在前」
どこからともなく男の声が聞こえてきた。それと同時に見たことのないきれいな羽――気が付いたときには剣になっていた――が口裂け女を貫いた。もうちょっとで俺も貫きそうで失神しそうになった。冗談抜きで。エリートだった少年が突然ヤンキーになったりしたときに母親が失神する気持ちもわかったよ…
風船から空気が抜けたような音と同時に口裂け女が霧になって消えた。体の自由を確認した俺は周りを見てみる。掴まれていた腕が真っ赤だ、場所によってはちょっと痣になっている。痣を気にしていると、羽と一緒に学生服を着た男が現れた

俺は忍者、たまに陰陽師もやってる

次の日、俺は朝早くから学校に来ていた。とあるクラスメイトに会いたかったからだ。

「あーおはよう」

元気に挨拶するつもりだったが、弱気になってしまった。何しろ目付きが鋭いというわけではないが、目が怖い。眼力がすごい。しかもイケメン。自信がなくなるよね。

「剣君、だったよね？」

とりあえずクラスメイトの名前と顔は完全に一致した。担任の几帳面さも無駄にならなかったわけだ。でも剣の目付きが怖い。名前のとおり剣で斬られるような視線だ

「そうだけどなに？」

「いや、昨日のお礼が言いたくて」

「ふーん…」

安倍は自分をジロジロと見回す。朝飯の時に飲んだ牛乳がヒゲでも作っていたか？

「君は…」

「俺は小早川俊介。ピチピチのチェリーボーイさ」

「うんありがとう、ところで俊介くんさ――」

あ、面白いところを無視しやがった！普通はなにか反応を返してくれてもいいだろう…しかし、目線がすこし柔らかくなった気がする。それでも角材で殴るような感じだが…引かれたか？

「――自分で家まで帰った？」

「は？」

俺は訳がわからなかったそりゃ自分で帰らなければ、今ここにいないだろうさ

「自分がどうやって帰ったか思い出せる？」

そういえば思い出せないな…多分電車を使って帰ったんだろうけど

…口裂け女が霧になって消えてから今朝起きるまでの記憶が全くない。
　しばらく黙っていたが
「そうか…でも抜けてなくてよかったよ」
抜ける？魂が？
「あ、そういえばあの綺麗な羽ってなんの鳥の羽なんだ？」
安倍はポケットから何かを取り出そうとする。それは先がまるで目のようになっている羽だった
「孔雀の羽。上げるよ　お守り」
「これは剣とかにはならないのか？」
突然目をぱっちりと開き、手を胸の位置で大きく開いている。ビックリしたことを表したいらしい。
「すごいなお前、そこまで見えるのか！動体視力いくつだよ」
あれ？いきなり馴れ馴れしくなっていませんか？まあいいか仲良くなるのはいいことだ
「まあな。ありがとう」
そして俺は羽を学ランの胸ポケットに入れる。
――ところで、この羽根は剣になるのか？

トレジャーハントしないか？

昼休み俺は安倍と昼食を一緒に取ることになった。俺は母親がつくってくれた弁当。安倍はコンビニ弁当だ。
「お前ってさ、何者なわけ？」
安倍が訊いてくる。むしろこちらが聞きたい
「俺は普通の高校生だよ。むしろそう信じたい」
「俺は忍者だよ。あと陰陽師もやってる」
なるほど、日本の有名な超人をやっているわけか。いやいやいや、納得していいわけ無いだろう
「じゃあ、壁とか天井に貼り付けるのか？式神呼べる？」
「余裕余裕、でもやらないけどな。いくら挑発されても」
俺もやるとは思っていなかった。こんなに人がいるんだ。忍者って言うのもバレたら困るだろう。普通なら「コイツ頭おかしい」と一括りにしてしまうが、口裂け女を見てしまった今、正常に判断することはできなかった。
「ハハハ…そうか」
じゃあ放課後にでも披露してもらおう
「やあ！君たち！」
なかなか元気のいい声が響いた
「ところで安倍、昨日の女は一体なんなんだ？」
「ああ、あれか…鬼（モノ）だよ」
「私をムシスルーなー」
女の子が割り込んできた。うん、なかなかの美人。でも同じクラスではないようだ。俺が名前を知らないから
「お、なかなか上手いな」
「何が？」
「”無視”と”スルー”を掛けたんじゃないのか」
安倍がフォローしてくれる。

ヒュー
口から空気が漏れる音がして、それから急に女の子の耳が赤くなった。
「オヤジギャグ行ったのがバレたくらいで恥ずかしがるくらいなら言うなよ」
「ままま、まあ、とにかく！君たち！トレジャーハント同好会に入らないか？」
また奇妙な同好会だな。エジプトにでも行かせてくれるのなら入ってやってもいいが
「面白そうだな、で部員は？」
「今は私一人」
安倍がそんなことを言うなんて驚きだったが、それより驚いたのが部員が彼女ひとりだけということだ。とりあえずまだ4月だから3年生は残ってるはずだろ？セーラー服の襟章は一応1年生のものになっているし…
「へえ…」
まだ安倍は興味深そうに見ている
「もしかして一目惚れでもしたか」
「まあ、そんなもん」
彼女には聞こえないようにしている
「あ、ところで君名前なんてーの？」
俺は名前を聞いていないことに気づいてとりあえず自己紹介をお願いする
「私は高原　春子だ」
ハルコちゃんね…覚えた
「俺は小早川　俊介　で、こっちは…」
「田中太郎」
あれ？安倍くんだよね？なんていう疑いの目で見ていると脇にワンパン入れられた。本当なら床を転げ回りたいところだが、女の子がいる前でそんなことはできない

「ありそうでなかなか無い名前だなー、小早川に田中だな。覚えた。それじゃあ行こうか！」
「へ、どこへ？」
ハルコは審査員が全員１０点をつけるような満点の笑顔で
「部室」

まずはこの暗号をといてもらうぞ！

俺は今部室棟に来ている。この高校はなかなかでかい高校で部室棟まで用意されている。自分は部活に入る気がなかったのでまったく眼中になかったのだが。

「ここだ」

やってきたのは最上階の隅。日も当たらないとても暗いところだった…。扉の前にきのこも生えてるぞ？

「くらっ…っ」

すねを蹴られた

「財宝をさがすんだったら、これよりもっと危ないところに逝くかもしれないんだぞ？」

本当に行く気ですか？

「入ってみようじゃないか」

安倍が扉に手をつける。そこは部員がやるところじゃないのか。

「オオッー」

つい声が出てしまった。廊下とは違って中はかなり綺麗になっている。というか綺麗すぎだ。床には絨毯がひかれて、真ん中にはテーブル。そして天井にはシャンデリアがぶら下がっている。

「これがトレジャーハントの醍醐味だな！」

悔しいが、認めざるをえない。声まで出してしまったからな。

「まずは体験してもらおう」

体験？何を？今から財宝探しにでも行くのか？

　ハルコは本棚に収まっている本と紙をテーブルの上に置いた。本は台紙が真っ赤で魔導書みたいだ。紙にはハングルのような、それでいて楔文字のような文字の下の方に日本語が書かれている。

「この本の１３５~１７３ページの内容をこの紙を照らし合わせて、暗号をといてみてくれ」

なるほど、そんな感じの体験なら喜んでやりましょう。俺はインド

ア派なのさ。しかし、いつの間にか俺の前から本は消えて、代わりに安倍の声が聞こえてくる。
「この本を読みしものに我ら魔道騎士の宝をしんぜよう…」「別れと始まりの起こる月に3界が乱れるだろう…これで終わりだ」
こいつ、俺の楽しみを奪った上に何故か紙がなくてもスラスラ読める。忍者で陰陽師でインディー・ジョーンズじゃないのか？
「それは本当か？というかお前何者だよ」
ハルコが驚きの声を上げる。
「俺はただの高校生さ。そしてチェ『すまん、私先に帰る！明日も来て！』」
途中で遮られて悲しそうな顔をしている。なかなか感情豊かだな。
初めて喋ったときはそんな気しなかったが。
　それと、デジャヴを感じるのは気のせいか？

帰り道

部室に残された俺達はやることもないということで一緒に帰ることになった。
「そういえば」俺はまだ完全に聞けていなかったことを思い出した。
「あれは一体なんだったんだ？」
「口裂け女のことか？さっきも言ったけどあれは鬼（モノ）だよ。」
「それは分かったがもうちょっと詳しいことが聞きたい。名前だけじゃサッパリだ」
「そうだなぁ　じゃあお前は幽霊とか信じるタイプかな？」
「まあ、信じてる」
「なら話は早い。そんなものさ」
「幽霊や、お化け…ってことか」
「そう。だがね」
話の途中で自分よりも背の高いおばあちゃんが声をかけてきた
「おやまぁ　ケン君じゃないかい。」
「これはこれは」
安倍も知り合いなのか、軽く会釈する
「まだ妖怪退治やっとるのかい」
「それが仕事ですから…」
すこし笑顔に陰りがあったような気がした
「そうかい、まあ頑張りなさい」
「ありがとうございます」
と、おばあちゃんは走っていった…走って！？あのバイクより早いぞ？あ、バイクから人が転げ落ちた。
「あれは音速婆（おんそくばあ）だ。今はターボ婆ちゃんとか言われてるみたいだが。アレも鬼の一つだ」
「でも退治はしなかったな」
「ああ、鬼は鬼でも悪事を働く奴、ただそこに存在する奴…といろ

いろいるからな」
「お前は悪事を働く鬼を退治してるってわけか」
「そんなもん」
この会話が終わってからは喋ることがなくなった。そういえばあの本の内容はどんなものだったんだろう
「あの本、お前はどうして読めたんだ？」
ケンは多少迷っていたが
「ちょっと前に読んだことがあるだけだ。妖怪退治の一環でな」
なるほど、まあいろんな所に行く機会があるんだろう
「あれってちょっと古文調だったけど、どういう内容だったんだ」
一番気になることを聴いてみる
「あれは、魔道騎士の宝っていうのは”何事にも屈せず、すべてをやり通す精神”のことだな。一番気になるのは今年の春に3界が乱れるということだな」
最後の最後がそんな内容だったな
「別れと始まりの月っていうのは多分春だ。で3界っていうのは恐らく、冥界と天界、そして魔界のことだな」
あれ？人間界は？と思っていると
「人間界はそのどこにも属していない。3角形でその3界をつなげるとしたらその中にあるようなものかな。そしてどの世界にも繋がっている」
へぇ～と感嘆の声を挙げていると、急に口を抑えられた。う～う～唸ってる俺がうるさかったのだろうか
「鬼がいる」
まさか口裂け女が俺を襲いに来るんだろうか？だが、今回はスケールが違った。かなりでかい犬の首だった。目がとても赤い、ウサギさんみたい…ではない
「お前は後ろに戻って遠回りして家に戻れ」
何も言えなかった俺は足手まといになるまいと頷いた
「とりあえず憑き物をつけておいた」

なんのことだかよくわからなかったが、お守りみたいなもんだろうと思って礼を言ってそのままきた道を逆に走った。

そのときなぜか足がかなり軽かった

嫌な再会

爆発音のような音がしているがかなり小さくなっているそろそろ迂回してもいい頃だろう

そのまま俺は路を曲がり、ずっと走っていく、足は軽いまんまで疲れ知らずだ。これが火事場の馬鹿力という奴か

だがその足も止まった。止まりざるをえなかった。真ん前に目出し帽にサングラス、マスクの女が立っていたのだ

「私が尋ねたとき、あなたは何も答えなかったわよね？」

そういえば殺すって言われたような…その瞬間、女は顔のすべての装備を剥ぎ、避けた口を顕にした。長くぼさぼさした髪を振り乱し、はしってくる

やばい、道は細いから横にそれることもできない、この速さだと後ろに逃げても直ぐに追いつかれるだろう。あと何秒くらいであいつは射程距離に入る？

そんなことを考えていたがはっと我に帰ったとき、ここはどこだと思ってしまった。自分は身長の3倍ほどの高さを飛んでいたんだ。そして女の頭上を飛んで距離を取る

「お前、ナニモノ？」

俺は綺麗に着地する、足を骨折でもするかと思ったが、そういうことはなかった。これも憑き物のおかげか？

「俺はただの…」

言ってる間に口裂け女が走ってくる！周りを見渡すが、やはり逃げ道はない。もうあんな高さを飛べる自身もない。

地面に孔雀の羽がおちている、着地するときに胸ポケットから出たのだろうか。

俺はそれをのんきにも拾い上げた。するとどうだろう、驚くことに羽が光を放ちつつ、大きくなったんだ、ところどころに刺があっ

て先端が尖っている。まるでライトセーバーの強化版みたいに
「っ…」
口裂け女が走るのを止めた。チャンスは今しかないと思う。安倍みたいに綺麗なに本当みたいにはなってないが、それでも形は剣だ。ところどころに反り返った刺があるライトセーバー。しかも長い。
「ぬおおおお」
剣を前に突き出して走る。気分はケンタウロス。
「くっアアア」
口裂け女の胸部に突き刺した。自分も手の爪で少し引っかかれてしまったが…
俺が初めて安倍に助けてもらったときのように霧になって口裂け女が消えていた
バーンッ
鼓膜が破れそうになるほどの爆音が響いた
音のした方に近づいてみると凄まじいきのこ雲が立ち上がっていた
「あそこは」
安倍と犬の首が戦っていた場所――

憑き物

次の日の放課後も俺と安倍は部室に来ていた。
爆発が起こった後、バカな俺は直ぐに安倍のところまでもどっていった。そこには土煙が上がり地面がめくれ上がっていて、どれだけものすごい爆発があったかを物語っていたにもかかわらずそこには安倍だけが残っていた。
しかも無傷で。
安倍の話によると、最後のあがきで犬神（途中で名前が判明した）が自爆したらしい。迷惑な話だ。しかし、こんな惨状だと、明日の一面トップはいただきだな。なんて思っていたが、今日の朝刊のトップは政治家が行方不明になったというものだった。
訳を聞いてみると、安倍の知り合いに、記憶が操作できる人と物を治す力を持った人がいるらしい。
そんなこんなで、俺達はまた暗号を解読していた。過去形なのは、安倍がハルコの持ってきた暗号を全部音読してしまったからだ。悔しがるかと思ったが
「田中お前すげーなぁ。なんでそんなスラスラ読めるんだ…」
そんなことをブツブツ呟きながら部室を出て行った…。お花摘みにでも行ったか。というか安倍、本当にすげーな。
「お前すごいよな」
突然安倍が声をかける。
「俺は何もしてないけど？こんな謎の文章を普通に読めるほうがどうかしてる。」
これは俺の率直な意見だ。それに俺は何もしていない。
「憑き物がお前に懐いているんでな…」
昨日は確か、逃げる直前に憑き物をつけておいたとか言われたっけな…動物の幽霊をつけられたか？犬だけは簡便な、あんなの見ただけで気が遠くなる。

「馬の憑き物を付けていたんだが…どうやらお前の中にいるのが心地がいいらしい」
「そんな気色の悪いことを言わないでくれ」
「ハハハ大丈夫だ。そいつは悪い奴じゃない。むしろお前を助けてくれたんだ。感謝しろ」
助けてくれた、か
「やけに足が軽かったり、むっちゃ高く飛べたのはこいつのおかげなのか」
と俺は指を指そうと思ったが、どこをさしていいかわからなかったので自分の胸を指すことにした
「まあ、そんなものだ。憑き物にも妖精みたいな奴もいるんだ」
「座敷わらしとか？」
「それも」
「なかなか陰陽師らしいことをしてくれるじゃないか」
「忍者らしいこともしてるぞ」
「本当か？」
「ああ、本当だ内緒だけど」
聞いてねーよと言いかけ、”い”の部分で扉が壁を叩きつける音で遮られてしまった。
「お前ら喜べ！マジシャン・オブ・ゴッドに会えるぞ！」
マジシャン　オブ　ゴッド…なんだ、マジックを使う中でもカリスマ的存在の人か？
「遅すぎるな」
安倍の顔には笑みが漏れていた

魔法少女と爪

そのマジシャン・オブ・ゴッドとやらには明後日に会えるらしい。とりあえず大脱出魔術を披露して欲しい。

今はハルコと一緒に家路についている。安倍は誰かに呼び出されたとかで先に帰った。

「田中スゲーよなあ。一体何者だよ！」

「さあな、むしろ俺が聞きたい…」

「あのリングルはまだ完全に解読された文字じゃないんだけどなぁ…あいつはいつ生まれたんだ？」

それは多分１５年前だろう。陰陽師とか行ってるから生まれ変わりかもしれないがな。というかリングルってなんだ？まだ解読されてない？

「あれはお前が考えた暗号じゃないのか？」

あっというような感じで口を片手で覆う。ちょっと可愛い。

「あの人には言わないでくれよ、俺が口を滑らせたこと」

多分マジシャン・オブ・ゴッドのことだろうな。きっとその人が考えた暗号なんだろう。俺は「ああ」とだらしない返事をしながら会釈した

「助かる」

満面の笑顔で言われた。そんなに困るのか？やっぱり喋ってしまおうか。

そんな顔をしてるのがバレてしまったのだろうか

「絶対に言うなよ！」

念を押された、念を押されれば押されるほど言いたくなる。だがハルコの目がすこし涙目だ。言うのはやめよう。やばい、俺ジェントルマンだ

「分かった分かった。じゃあ交換条件だ。この暗号はいったい何だ？誰が作った？」

やっぱり世渡りはうまくいかないとな。
「あれは古代スペース文字で…」
ハルコの歩みが止まった。俺ももちろん止まる。みんなも奇妙な物体や人を見れば少しは歩を止めるだろう。なにしろゾウの頭をした巨漢だ。女かもしれないが。
「ベヒモス…」
ハルコが呟く。お知り合いですか。仲の良い友人というわけではなさそうだ。少し後ずさっている。刹那象頭が一気に距離を詰め、殴りかかってきた。
危ない！と叫びたかったが、やはり声はでない、だが何故か体は動いた。馬の憑き物のおかげだろうか。なかなかの距離を横っ飛びした。ついでにハルコの体にもタックルしたから二人とも巨漢のパンチは避けられたということだ。
「ヤバイな…」
独り言を言ってしまった。あまり言いたくはないんだが…ゾウのパンチは床に当たって小さなクレーターになっていた、そうも言いたくもなるだろう
とりあえず俺はハルコの前に出る。ここは恰好つけよう
「高原、お前は先に逃げろこのゾウ頭は俺がどうにかする」
後ろを向く余裕はない、返事はないが恐らく頷いているだろう。そう信じたい
俺は象に向かって走る、馬の憑き物のおかげだ１００メートル５秒くらいでいけてるんじゃないか。そのまま蹴りを入れる。馬蹴りを。うまくゾウ頭の肥えた腹に入り、ゾウ頭は道路を削りながら３メートルほど滑る――
――滑っただけだった。油断していた。アイツの攻撃手段は腕だけじゃなかった。ゾウの一番特徴的な部分。鼻を鞭のようにしならせて俺を打つ。そのまま俺は中に浮き、側面のブロック塀にたたきつけられた。
背中を強く打ち付け、息が苦しい…

「なんだ、あいつをぶっ飛ばしたからただの人間じゃないのかと思ったがそうじゃなかったか」
いつの間にかにハルコがゾウの前に立っている。しかも鉄製の爪のようになっている手袋も付けている
「燃えよ爪（タスク）！」
ハルコが叫ぶのと同時に爪が炎をまとった

ハルコが爪――ハルコがタスクと呼んでいた物――が炎をまとい
「貪欲を貪りし悪魔、ベヒモスよこの爪の業火で浄化されよ！」
叫びながらハルコは爪でゾウを切り裂く。アイツはベヒモスと言うのか。なんで俺は事が終わってから名前を知ることが多いんだろうか。
ゾウ――ベヒモスは膨らんだ腹を切り裂かれ、その傷口から火がついた。まるで何かの祭りかパレードのフィナーレのようだ。火がベヒモスを完全に覆い、しばらくすると、黒い霧になって消えて言った
「魔法少女、お前に伝言があるぞう、是非お前を我らが仲間に入れてやりたいぞう。その気があったら明後日『パチン』」
ハルコが指を鳴らすとその声は全く聞こえなくなった。ついでにハルコの手から爪まで消えている。
「大丈夫？小早川」
またパチンと指を鳴らすと体から痛みが抜けた。本当に魔法少女か？
「ああ、ありがとう」
俺は起き上がり、砂埃をはらう。
「建物をこんなにしやがって、これを直すのが一番手間のかかる魔法なんだよ」
といかにも不機嫌そうに声を荒らげながらもう一度指を鳴らす。するとなんということでしょう、ベヒモスのパンチでぱっくりあい

た穴や、自分が叩きつけたブロック塀が見事に元どうりになったではないですか。
地形を元通りにする…？ということは実はコイツは安倍とも知り合いなんじゃないのか？
「なあお前ってさ、安倍と知り合い？」
あれ？あいつは田中って紹介してたっけか。まあいい、もし一緒に仕事をしてるとしたら安倍で通るだろう
「いや、誰それ？」
俺の推理は一瞬にして破綻した。もしかして、この世界には何百人も忍者やら陰陽師やら魔法少女がいるのか！？
「小早川の記憶が操作できない、か…お前本当に何者だよ」
「俺はただの高校生さ。そしてピチピチのチェリーちゃん！彼女募集中」
「うわキモッ」
1秒もかからずに俺の存在を否定された。
「私のことは誰にもないしょだからな！田中にも教えちゃだめだぞ！」
魔法少女も忍者と同じようにいろいろな事情があるんだろう。俺は生返事をして
「それじゃあ帰るか」
とハルコが指を鳴らすのと同時に姿が消えた。僕をおいて行かないで！心のなかで叫んだが、帰ってきたのは寂しい風の音だけだった。
その後は特に何もなく家にたどり着いた。

首切り馬の馬蹴り

次の日

また、俺は部室に来ている。本当なら安倍が高原の持ってきた暗号を解読させようとやってくるはずなんだが、今回はかなりの急展開。

俺と安倍、高原は全員腕を後ろに縛られている。

決してそういうプレイとかでは断じてない。まあ、ちょっとは興味あるけど…

と、そんなことを考えていると、目出し帽をかぶった男がこちらを見た。コイツらが俺を縛ったんだ。理由はわからない。銀行強盗が逃げ出したとかそんな話はどこにもないし。

というか警察がやって来ない。この国は本当に大丈夫か？それともこのテロリストもどきがやり手で、まだ警察にまで話が行っていないとか？

「おい」

隣にいた安倍が声をかける。耳にかかる息が生ぬるくて気持ち悪い。早く話終われ。

「俺がアイツをやる。その間にお前は高原と逃げろ」

「逃げるたって、外にもテロリストはいるぞ？」

「大丈夫だ。道案内をつける。それに、高原もいるし、憑き物も付いてるんだぞ？」

女の子だから殺されないって意味で言ってるのか？

「いざという時は守ってくれるさ」

あー、そっち。安倍さんは物知りですね。

「お前、知ってたのか」

「まあね。向こうは気づいてないみたいだけど」

安倍は俺を通り越してテロリストを睨みつけているハルコを見る。

そういえば一番重要なことを聞いていなかった

「この縛られたロープはどうするんだよ」
後ろ手に縛られたまんまじゃろくに走れない。
「これを使え」
安倍は何も差し出すことなく、言葉だけを発する。安倍が「臨」と言うと俺の手にふさふさした感触をしたものが現れた。”羽”だ。
「それでお前と高原のロープを切れ」
ナイフにでもなるんだろうか。安倍がよこしたんだ。ただの羽じゃあるまい。
「お前は大丈夫なのかよ」
「大脱出はお手のものさ」
言いながら、安倍はロープをほどく。
「高原、聞いていたか」
「な、何をだ！」
「馬鹿！声がでかい」
手を押さえてしまいたくなったが、縛られていて無理だった。テロリストは表情はわからないが不審そうに俺達を見る。
だが、愛想笑いをしていたのが項を奏したのか、また別の方を見た。
それをチャンスと捉えたのか安倍がテロリストにサマーソルトキックを食らわせる。安倍のキックは見事にテロリストの顔を捉え、テロリストは宙を浮いた。
「今だ！早くいけ！」
安倍が怒声を浴びせる。俺は羽のナイフで小気味よくロープを裂き、高原のもほどく。
「またあとで、運動場で落ち合おう」
テロリストを押さえつけている安倍は不気味に笑っていた。

「お前計画性なさすぎだろ」
「なにが？」

計画性がないも何も俺が考えた作戦じゃない。
「ここを出たのはいいけど、一体どこに行けばいいんだよ！」
俺が聞きたい。安倍は道案内をつけると言っていたが、そんな奴はどこにもいないぞ。
すると俺の右肩にすこしふわふわしたネコよりはちょっと大きい物体が乗っかってきた。そのまま俺の前方に飛び、長い耳を上下させながら俺を見る。
――ウサギだ。
「うわーっ、可愛いー」
ハルコが嬌声を上げる。小学校の時に学校で飼っていたがそれを超える可愛さだ。
ウサギはちょっと前進して止まり、俺たちを首だけ回してみる。
――付いて来いと言っているのか？
「これが道案内か」
ウサギは階段まで行き、階段をひとっ飛びで降りていく、かなり早い。姿を確認するのがやっとだ。どんどん距離を離される。
「あっ――」
やっと一回まで付き、扉の前まで来たところでハルコが声を上げる
「結界がはられている」
バリアみたいなものか？あのテロリストもそんな魔法とか使えたのか。
俺はその結界が張られたという扉に近づいて開けようとした。だが開けようとすることさえできなかった。扉の前まで行けないのだ。
扉の周りにまるでブヨブヨの膜が貼られたような。そんな感じ。掴めないし、触れない。
「離れて！」
ハルコがそう叫んだ少し後、まるでフラッシュライトを焚いたような凄まじい発光が起こった。
しばらくして視界が正常に戻ったが、扉の周りは黒焦げ。その焦げ跡の真中には黒い色のついた白い羽が落ちていた。

俺もあのまま”アレ”に触れていたらそのまま黒焦げ焼死体になってたんじゃないか
「あれは…まさか、そんな…」
ハルコは怯えきってしゃがみ込んでしまった。「そんなはずは」とか「しんじられない」とかブツブツつぶやいている。なにか事情を知っているようだ。
「お前、これを誰がやったか知ってるのか？」
「こんなの嘘よ！だってあのひとがそんな事するはずないじゃない！ねえ」
しがみつかれてしまった。俺に聞かれても困る。
「大丈夫だ。たぶん、」
少しいい加減だったか。ハルコは「そう、そうよね」と力なく崩れて言った。
触れると黒焦げになる結界、後ろにはテロリスト。これが四面楚歌ってやつか。左右にはまだ何も来てないけど。来たら本当に死を覚悟したほうがいいかもな。
しばらく思案していると俺は思い浮かんだ。
普通の人間じゃ壊せないものでも、ふつうじゃない人間が作ったものなら壊せるかもしれない。
俺は胸ポケットに入れてある孔雀の羽を取り出す。ライトセーバーになった羽だ。
俺は念を込めるつもりで羽を見つめる。
――念を込める
――ライトセーバーになれ
――なってくれ
――なれよ
――…
全く駄目だった。あの時は安倍がなにか細工をしたのか…
ハルコは今怯えきっていて、とてもじゃないが頼める雰囲気じゃない。今は俺の力でどうにかするしかない

――馬蹴りは試したか？
どこからか声が響く。俺はあたりを見渡す。いるのはしゃがみこんでいるハルコだけだ。
――ほら、俺だよ俺
新手の詐欺か？若いヤツを狙っても意味ねーぞ
――詐欺じゃねーよ
そうか、じゃあお前は誰なんだ…あれっ心の声が聞こえているのか？
――俺は憑き物の馬。首切り馬だ
そうかそうか、首切り馬か。今憑き物とかいったか？
――そう、俺はお前の中にいるんだぜ
だから心の声が聞こえるのか…迷惑な話だな。足が早くなったのはお前のおかげなんだな
――憑き物って言うのは疲れたものが身体的に変化するんだ。
俺の足は馬の足になってないみたいだが
――そんなおもいっきり変わるわけ無いだろ。能力だけだ。
で、馬蹴りっていうのは？
――魔を込めた蹴り
捻りなしかよ
――そんな事言うなよ。ゾウ頭ぶっ飛ばしただろ？アレも俺のおかげ
そうか、試してみる価値はあるかもな
――使い方は簡単。足に力を込めてけるだけ
本当に捻りがねーな。もうひとひねりくらい欲しかったが。
試さない理由はないか。ここ以外に逃げ道はない。
俺は足に力を込める。そういえばなにか行動をするときって、あまり力をいれるのを意識したことはなかったな。
足の筋肉が硬くなるのを感じる。もうそろそろか…あと3秒数えよう
…3

…2
…1
シュート！！
俺は翼くん並に華麗にシュートを決めたね。
結界は風船のように割れるかと思ったら、小気味よくガラスの割れる音がしてまた発光した。ついでにバチッと通電してしまったが、静電気程度だった。馬刺しにならなくてよかった。
――てめーの首を落としてやろうか！

バジリスク

俺達は上手いことを部室棟を出ることができた。ハルコはまだ暗い顔をしている。

「この学校から出ることはできないかもしれない」

「おいおい、せっかく出れたのに第一声がそれか」

正直魔法だったり忍術だったり馬だったりはよくわからん。というか馬って喋る？でもここまでこれたんだ。きっと出られるさ。

「だってこんなことをしたのはあの人だもの」

「大丈夫、安倍がいるんだぜ？あと俺も」

「安倍…？でもあんたが役に立つわけ無いでしょうが」

「ごもっとも」

俺は満面の笑みで返してやる。ハルコにも少し笑みが戻ったようだ。これでもしもの時は守ってもらえるかな

部室棟は運動場を挟んだ校舎の反対側にある。そのまま走りぬけようとした瞬間、部室棟の最上階から花火のような音と同時に煙が巻き起こった。

そのままトラックの真ん中に2対の影が落ちる。

「うおっ」

俺は情けない声を上げた。そのまま何メートルか吹き飛ぶ。その直後ガラガラと壁が崩れ落ちる。また凄まじい火柱が上がり、俺の周りが黒煙で何も見えなくなった。

３０秒も経てば黒煙も風で吹き飛ばされたのか、すっかり澄んで見える。

「もーなんなんだよ」

ハルコがスカートに付いた土をはらう。

――ガーともウォオーともつかない叫びが運動場を包む

「ッ…」

ハルコは相当嫌そうに耳をふさぐ。自分はあまり気にならなかっ

たのでそのまま声のした方に目を向けた。
「安倍！」
「田中！」
ハルコと俺は同時に声を上げた。俺は安倍の事を田中と呼んだことをつい気にしてしまい、ハルコの顔を見る。向こうも同じことを考えたのだろう。顔を見合わせる形になった。
何故かハルコの顔が赤くなる。りんごのように真っ赤だ。顔を逸らし
「あれみろよあれ！田中危ないんじゃないのか？」
俺も首を回して、ハルコと同じ方を見る。目出し帽をかぶったムキムキマッチョが安倍の首を掴んでいる。
本当に危ないんじゃないのか…しかもあの巨体…さすがにあの安倍でも敵う相手ではないのかもしれない。
俺はあのマッチョに馬蹴りをお見舞いしてやろうと前に出ようとする。が、ハルコに腕を掴まれた。
「田中を見ろよ」
青ざめた顔をしながら言うハルコを見やってから俺はもう一度安倍を見てみる。すると安倍は不気味に笑っていた。とても寒気がする。
安倍の右手に純白の羽があった。安倍が口を動かす――残念ながらなんと入ったのかは聞き取れなかったが――と純白の羽が紫色に変色し、グニャグニャとしなりながら伸びていく。
「あっ」
気づけば阿部から手は離れていた。そして逆に鞭のようにしなった紫色のロープがマッチョを持ち上げていた。
ロープの先端が奇妙にマッチョの顔の前で左右している。いや、あれはロープじゃない。ヘビだ！ヘビがマッチョを縛り上げているんだ。
ヘビがマッチョの首に噛み付く。激しく体をくねらせた後、マッチョは金粉のような粉になって消えていった。

――あれも鬼（モノ）なんだろうか
安倍は平然と俺達の方に歩いて来る。いつの間にか蛇は消えていた
「田中お前すげーな！バジリスクを使役できるなんて！」
バジリスク？あの蛇の王のか？
しかし、安倍は反応しない。ハルコのことが嫌いなんだろうか。
そういえば出会ってから今までハルコの呼びかけに応じたことはなかったな。黙って本を解読してただけだ。
「なあ高原、お前ここ周辺の修復頼めるか」
「自分が魔法少女ってことバレてるの？おい！小早川っお前喋ったなー！」
「喋ってねーよ！というか信じてもらえるわけねーだろ」
「田中なら多分信じるぞ」
「かもな」
安倍が軽く咳払いをする。
「とにかく、頼んでもいいか」
「お、おう」
ハルコは指を鳴らし、一瞬で直した。
「やっぱり魔法は便利だな」
安倍さんがやってることも魔法と大差ないですよ？
「高原」
「はっはい！」
安倍がドスの利いた声で喋ったせいだろう俺もつい体をこわばらせてしまった。
「今回のこれ、お前に関係するのか？」
「私は知らない！」
「ほ、ほら、ハルコも今回のことを相当怖がってたし、もうちょっと優しく…」
フォローを入れたつもりだったが、大失敗だ。思いっきりハルコが関係してると言っているようなものだ。
その時俺はアホな顔をしていたことだろう。

ハルコが口を開く
「今回の結界なんかはとてもあの人のものと特性が似ているんだ。
」
――あの人。これが今回のキーパーソンらしい。

あの人

３人は共に道路を歩いている。詳しいことは話しながら帰ろうと俺が提案したんだ。
空はもう暗い。都会だからだろうか、星なんか見えない。月もかけらだけちょこんと浮いている。
ちなみに、ボロボロだった部室棟は完全に修復され、その１部始終を見ていただろう人物の記憶は全部消されたらしい。
是非俺の記憶も消してほしいね。
「あんたね。記憶を消されたらどうなるか知ってる？」
なにか弊害があるのか？
「記憶を消されたらしばらく夢遊病のようにぼーっとするのよ。それで、ある時はっと気がついてなんで私はここにいるんだろうってなるのよ」
そんなことより魔獣だったり鬼（モノ）と闘うほうがよっぽど嫌だね。
「そんなに嫌なら、僕がしばらく結界を張ってあげようか」
俺はそんなにイヤそうな顔をしていただろうか
化け物から俺を守ってくれる結界なら喜んで張ってもらおうじゃないの
「誰からも認識されなくなる奴を」
ちょっと斜め上過ぎません？
「それは、俺の影を薄くするって意味か？」
「完全に無くすんだよ。君という存在を」
「ちょっとそれは怖いな」
「結構きちんとした儀式をしなきゃいけないし、失敗したら最悪死ぬ」
ちょっとそんな怖いこと言わないで。
「いやー、この儀式は一回しかやったことないからなぁ久しぶりにやるとなるとドキドキするよ」

「とりあえず、足に力は入れておくぞ？」
安倍は俺から少し距離をおいた。忍者で陰陽師でも、この馬蹴りは怖いのか。
「冗談だよ」
俺はこれほど安心したことはない。何しろ神職がやる儀式だ。決して”心だけ”のものではないだろう。
絶対に何かある。本当に。
「ぷっ。あはは」
ハルコが腹を抱えて笑う。何がおかしいんだ。
「何がおかしいんだよ」
少し声色を変えて行ってみる。
「いや、ごめんごめん。あまりにも小早川が滑稽だったからさ」
殴りかかってやりたがったが、ハルコの満面の笑顔を見るとそんな気も失せた。
ハルコの１００％スマイルは癒される。本当にこいつが爪（タスク）を使って化け物たちを切り裂き倒して行ってるとは思えないほどだ。
「なんだよ」
ハルコが満面の笑みから俺を見るいつもの顔に変わる。
なんだよ、と聞かれて、「お前の笑顔が素敵でな」なんてかっこいいセリフは出てこない。
俺が少し黙っているとハルコがソッポを向きやがった。
「そろそろ本題に入りたいんだが」
俺達の茶番劇をコイツも見ていたと思うと急に顔が熱くなった。
「え、本題？　本題ってアレか？俺の存在を消す話か」
「お前、本当に消されたいのか」
あ、目がマジだ。やばい。口裂け女を召喚されて本当に殺（や）られる。
「高原。お前、今回のことをよく知っているみたいだが？」
あっといった感じで目を丸くした後、俯いた。
「ああ、知ってるよ」
「それで知らないなんてシラを切られても困るがな」

「お前」
それはデリカシーがなさすぎるんじゃないか。だが、安倍は話を続ける。
「今回の主導者は誰だ」
「主導者は知らない……」
安倍はしばらくアゴを手でつかみ、思案する様子を見せた
「なるほど。それじゃあ聞き方を変えよう。今回の事件に関係している人物を知っているか」
「知っている。名前はマジシャン・オブ・ゴッド」
俺は衝撃を受けた。マジシャン・オブ・ゴッドということは、俺達は明日会いに行くことになる奴だぞ。
その後も安倍の尋問は続く。
――ほかに誰が関わっているのか、またあの目出し帽をかぶった男は誰なのか
様々なことを聞いていたが、分かったのはマジシャン・オブ・ゴッドが関わっていることだけだ。
ちなみに、結界っていうのはその人によって種類が違うらしい。だから向こうの世界では指紋のような感じで扱われるらしい。
――ハルコの結界もどんなものか聞いたが教えてもらえなかった
「これは個人情報ぐらい大切なモノなんだぞ。それに教えてもわからんだろ」
結界そのものを理解してないからな。――
さらに、結界はそもそも外部からの侵入を防ぐためにあるのであって、結界そのものが攻撃魔法になることはないそうだ。
「なんか頭がこんがらがってきたな…」
「ようするに、魔術神の結界は特徴的だから分かったってことだろ？」
「田中…それ、上手いこと行ったつもりかよ」
安倍は答えない。しかし、安倍は少し顔を赤くしている。初めて見たな。安倍が上げ足をとられる瞬間。

「魔術神……ね」
漢字にするととたんに強そうに感じる。あんな結界が張れるんだ。強くないわけはないだろう。それに、ハルコもあれだけ怯えていたし……
「なあ、高原とそのマジシャンズ・オブ・ゴッド『マジシャン・オブ・ゴッド！！』」
細かいことは気にするなよ。
「その魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）はお前にとってどういう関係なんだ」
「師匠みたいなものかな」
ハルコが少し顔を俯かせる。悪いことを聞いたかな。破門させられたとか？
「今でもそんな関係なのか」
安倍の問いにハルコがコクっと頷く。そういうのじゃないのか。
「お前の師匠なら相当強いんだろうな」
「当たり前だ！何しろ”私”の師匠だからな！」
ハルコが顔を上げて言う。少し笑顔が戻ったようだ。デリカシーがないとか言ってたけどナイスフォローだ、安倍。
「お前を褒めたわけじゃないぞ」
「うっうっさい、分かってるよー」
ああ、コイツは自分が褒められたという感じで喜んでたのか。褒めて伸びるタイプなんだな。
「褒めたら天狗になるぞ」
「え？」
「ちょっと最後だけ心の声が出てたぞ」
いや、絶対に出していない、つもりだが。ひとりごとは怖いな……。それとも読心術を使えるのか
少し元気を取り戻したみたいだし、もうちょっと魔術神の事を聴いてもいいかな。
「なんで、魔術神はそんなことをしたんだろうな。」
ハルコはまた悲しげな顔をして俯く。そんなに信頼を置いている

人物なんだろう。それに、裏切られたことがないと本当に傷つくからな。　俺も一回だけ、本当に信頼をおいてた奴に裏切られたことがある。もうどうでもいいが、決して許しているわけじゃない。
「私、こっちだから」
T字路でハルコが俺の進行方向とは逆向きを指さしていく。
「こんな夜道を俯いてると危ないぞ―」
「うるさい」
親切で言ってやったんだが。なんかちょっとこう、カチンと来るね。
「あ、俺も今日は用事があってこっちだから」
安倍はハルコの隣に付いて一緒に歩く。安倍が付いていればきっと大丈夫だろう。
安倍は格好付けて後ろを向いたまま手を振りやがった。
まあいいか。俺ものんびり家に帰ることにしよう。
馬蹴りの練習もしなきゃな。

電車の中

清々しい朝だ。なんとも空が青い
空が綺麗だと心もきれいになるみたいだ。今回何をしに行くのかを除けば。
「遅い！　お前今何時だと思ってるんだよ」
俺は駅まで来ている。入り口にはハルコと安倍がいる。
今日は１０時集合のはずで、今は９時５５分。十分間に合っている。
「５分前行動とか小学生かよ！」
「喋り方とか背丈とかはお前のほうが小学生っぽいぞ」
むむむ、といった感じでうなり声を上げ
「とにかく、社会人になったら１５分前行動が当たり前だろ！」
社会人じゃなくて高校生だが、ハルコの言っていることはもちろん正論だ。反論するなんて無粋なことをするわけがない……と思いたかったが、自分はまだまだ幼稚だ。
「いや、社会人じゃねえし」
「はあ？　お前、後２年もすれば大学生だし、就職もしなきゃいけなくなるんだぞ！？　それくらいの常識身につけとけよな」
「くっ……」
負けた。正論に屁理屈をぶつけたって、勝てる見込みが無いんだ。
「電車、来るぞ」
安倍は毎回いいタイミングで話を変えたりしてくれるよな。顔もイケメンだし、気も利く。そんなやつになんで彼女ができないんだだろうな。欲しい奴には全くできないし。
「ああ、じゃあ行くか」
「降りる人が先だからな。優先席には座るなよ。これがおとなの常識だ」
お前はまだその話を引きずるつもりかっ

しかもそれは大人とか社会人以前の問題だ。

俺達は電車に乗ってちょっと遠くまで行っている。もちろん魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）に会うためだ。

当然俺たちは貧乏学生で、指定席を取れるわけもなく、自由席だ。運良く向かいあわせの席が2つ空いていて、それに座ることになった。ハルコが窓側で、俺がその隣り、ハルコの向かいには安倍が座っている。紺色のシートはなぜだか知らないが落ち着く。

目的地まで後3駅。俺的にはもういいんじゃないかと思うが、安倍の尋問が行われている。

「あれが起こった理由はお前にはわからないんだな？　高原」

「ああ、私にはわからない」

「魔術神が何かを話していたとかは？」

「ない」

そうか、と安倍は頷きハルコの隣にすわっている俺の方に視線を送る。恐らく、もう終わってもいいかと聞きたいのだろう。もともと俺は、やるべきではないと思っていたからな。静かに頷く。

「なら、俺は高原を信じるよ。きっと魔術神もなにか理由があって、仕方なくやったのさ」

俺はフォローを入れたつもりだったが、逆効果だったようで、――俺も安倍みたいに気がきく男になりたいもんだ。――ハルコは俺とは逆方向を向きやがった。しかし、俺は何も言えなかった。男なら何も言えなくなるはずさ。

窓に写ったハルコの顔にうっすらと涙が浮かんでいたから――

ピクニック

俺達は駅を降り、山を登る。道はしっかり舗装されていて、周りも青々と茂っている。楽しいハイキングといったところか……目的を除けば。

「こんな山奥に別荘を持ってるのかよ……魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）さんは」

「ううん、持ってないよ」

持ってない？それじゃあ、魔術神さんは山の頂上でシートを引いて、楽しくおにぎりを食べましょう、とか言うのか。

「完全に貸切状態だな」

普通に駅も近いし、今日は休日だ。ハイキングの客が来てもおかしくないが、人は確認できない。というか本当に貸切なのか。

「結界が張られている。俺ら以外は多分入れないんだろう」

なんで結界を貼る必要があるんだ？普通に会うだけじゃないのか。

俺の疑問はどんどん増える。

「高原……」

俺はハルコに声をかける

「魔術神は絶対に悪いことをする人じゃないよ……」

「俺もそう信じたいんだがな、こんなことをされると信じられなくなるだろう…」

「なら来なければいいじゃないか！」

突然俺をドンと押しのけ、走っていく。

「あ、おい、待てよ！」

ここは敵の本拠地だ。ひとりで言ったら危ないかもしれない。追いかけようとするが、今度は安倍に手を掴まれる。

「なんだよ。」

俺は無理やりにでも掴まれた腕を離そうとするが、安倍の凄まじい握力にはかなわなかった。安倍は睨みつける俺に向かって諭すように

「一応あいつの師匠だ。愛弟子をいきなり殺すこともしないだろう」
まさか、突然俺らを襲って、しかもこんな人気のない山奥に連れ込もうなんて、完全に罠にはめようとしているんじゃないのか？
「正直に言おう。一般人のお前が来ても、ただの足手まといになるだけだ」
そんなのは分かっている。分かっていても、友達――であってまだ1週間たってないが――を見捨てるわけにはいかないだろ？
そんな気持ちが伝わったのだろうか、安倍はゆっくりと手を放す。
「分かった。急ごう」
安倍は俺を通り越して、先を走っていく。俺もあとに続く。
恐らく俺の足では安倍には付いてこれなかっただろうが、首切り馬の効力のおかげで何とか背中は捉えられている。俺が付いて来られているか、確認するためだろうが、チラチラ後ろを見てくるのはむかついたが。
――待っていろよ。ハルコ

あまり友好的に進みそうにない

「やあ、どうもはじめまして。魔術神(マジシャン・オブ・ゴッド)こと、アレイスター・クロウリーです」
俺と安倍は山の頂上についた。道は1本道で、途中カーブなんかあったが、迷うことはなかった。
頂上はピクニックをする登山客を考えてのことだろうか、広々とした芝生が広がっている。
周りには観賞用の木々が生い茂っている
「あ、ああ、はじめまして、小早川です」
しまった。つい癖で自己紹介してしまった
「田中です」
やっぱり安倍は本名を言わない。だが、俺は安倍を見る余裕はなかった。
アレイスター・クロウリーと自己紹介をした男が、ハルコを抱いていたからだ。ちょっと羨ましい
アイレスターは金髪で髪は肩まで位、よく手入れはされていてぼさぼさではない、目はブルーで明らかにこの国の人間ではないことが分かる。歳は大学生くらいだろうか。
「ああ、田中さんと言いましたか――高原くんから話は聞いてますよ」
安倍は返答しない。
「私はあなた達2人とゆっくりお話がしたいのであって、無意味な争いごとは避けたいんですよ」
「その割には、俺たちを殺そうとしたようだが？　」
「もうバレていましたか」
開き直ったのか、俺たちを見ながら笑う。その時抱いていたハルコの肩をつかむ。
「このやろっ」

俺は前に歩みでようとするが、
「止まれ、今は下手な動きを取らないほうがいい。高原の命がおしいならな」
安倍に言われた。確かに、ここから走っていったとしても、ナイフか何かを使われればはるこの命が危ない。
アレイスターはハルコの耳元で何かを囁いて、手を放す。
「高原には何もしてないだろうな」
「そんなに高原くんのことが心配ですか？ふっ、青春ですね。大丈夫です、物理的なことは何もしていません」
こっちに歩いて来るハルコを見る。何もしていないというのは本当のようだ。
「そ、そんなのじゃない。クラブメイトの1人だからな」
当たり前のことを言ったはずなのに顔が熱くなる
「なるほど、熱い友情ですね。感激で涙が出そうです」
ずっと薄い笑みを浮かべながら言う。泣きそうって言うならもうちょっと泣きそうな顔になってくれないか。気色悪い。
「どうやって使い魔を入れたのか、私には見当もつきませんが、さすがですね」
アレイスターは指を鳴らす。すると、どこに居たのだろうか、突然「シュー」という音と同時に床の芝生から頭にトサカのついた蛇がアレイスターに飛びついた。
アレイスターは蛇の方を水に再び指を鳴らし、蛇は純白の白い羽になった。
「使い魔の媒体に鶏の羽ですか…なかなか趣があっていいですね。私たち魔術師たちはだいたい髪ばっかりのことが多いので」
あれは鶏の羽だったのか。天使の羽とかのほうがロマンチックだと思ったんだが。
「それではパーティを始めましょうか……」
――Ｌｅｔ'ｓ　ｐａｒｔｙ！
そう叫ばれた瞬間、周りの木々から人の影が増えた。

木々の影から出てきたのは、軍服を着た屈強な男達。
軍服というのは、映画なんかでよく見るナチスドイツの有名な軍服だ。
「ナチスドイツか……なかなか趣味のいいものをお持ちのようだな」
安倍が皮肉たっぷりに笑いながら言う。
「ええ、あの頃のドイツの魔術研究は素晴らしいものでした。もうちょっと独裁政権が維持できていればおそらくは我々と同等の魔法が使えていたでしょうに。今でもヒトラーを蘇らせてあげたいと思うくらいですよ」
「馬鹿馬鹿しい、そんな死人を多く出すような研究に意味はない」
安倍が怒ったように言う。安倍にも人間らしいところがあるんだな。
「私の世界でも、魔術の研究で大勢死人を出しましたよ」
アレイスターも顔から笑みは消え、まるで悲しむかのような表情になる。
その間にも屈強な男達は近寄ってくる。確実に、足音を立てずにゆっくりと。
「ですが、私の目的はそれを終わらせることです。是非あなたにも協力してもらおうと思いまして」
アレイスターの表情は初めて合っていたものに戻っていた。
「それにしては、あまり友好的に物事を進めようと思っていないみたいだが？」
安倍も笑みを絶やさない。不気味だ。どうもイケメン同士が笑いながら会話してるのは寒気がする。
「あまり、あなたのような方はこんなことには協力してはいただけないでしょうしね」
「それは話によるな」
「まあ、無理やりやらせるだけですが。ねえ？　田中さん？」

急に安倍が押し黙った。自分で嘘の名前を言ったんだから、わかってないはずないと思うが。
「危ない！　」
ハルコが俺にケリを入れる。――このままぼーっとしてたら肋骨が折られる――軍服を着た男が俺に襲いかかっていたのだ。
手にはナイフ。ケリを入れてくれなかったら、肋骨どころじゃないな。それに続くようにほかの軍服たちも走り、襲いかかってくる。
「美しさに溺れ、美の女王となりし者よ」
ハルコがそう唱えると、ハルコの頭上に特徴的な模様が書かれた丸い円が現れ、そこから茶色い、まるで三つ編みを太くして束ねたような、大きな手が現れた。
その手は爪にマニキュアが塗ってあり、なんとなく女性だということが感じられた。
手は男の体を捉え、手を拳に変え、殴る。拳は男の体全体を押しながら吹き飛ばし、男は地面に倒れ、動かなくなった。
「すげーな。召喚魔法？」
「安倍に教えてもらったんだ」
安倍、お前はいつの間に春子に教えていたんだ。
その安倍はまたとんでもない強さを発揮していた。安倍は日本刀を握り、男達を切り倒している。安倍の周りには既に5体ほどの男が倒れていた。あ、また倒れた。
「田中、強すぎだろ」
ハルコは口を開けたまま安倍を眺めている。俺も同じ状況だ。本当に映画みたいだ。俺はこいつと喧嘩しなくてよかった。
しかし、まだまだ軍服はいるようで、俺達の方に走ってくる
「でえや」
華麗に俺はミドルキックを入れる。どうだ！俺の魔心の入ったシュートは。
ああ、調子にのるんじゃなかった。俺は背後を取られた。しかもはることの距離はさっきのキックでかなり離れてしまった。絶望的

だ。
後ろでものすごい風に巻き上げられる。何が起こったんだ？
そこにはさっきの茶色の手があった。なるほど、遠くにも召喚できるわけか。
「助かった。ありがとう」
いつの間にかハルコの手には爪（タスク）が装備されていて、俺に爪を突きつけながら
「銭湯の時は死角を毎回確認する！これは当然の行動だからな！」
確かにそうだが、その爪を俺に向けるんじゃない。俺に。
「というかお前一般人なんだからあまり調子にのるなよ。足手まといだ」
「すまない……」
確かに、足手まといかもしれない、だが俺は役に立ちたかった。
そんな行動をとったせいで足をひっぱることになるとは。
「まあ、お前の蹴りは普通じゃないし、自分の背中にくっついとけよ」
「ああ」
俺は嬉しかった。少しでもコイツらの役に立てることが。認められたことが。
俺はハルコの背と対象になるように立ち、死角を互いに補うようにした。
ハルコは爪と巨大な手で、俺は馬蹴りで。
男達はそんなに俊敏なわけではなく、蹴りくらいなら相手の攻撃を受ける前に当てることができた。
なんとか軍服は片付けることができたようだ。疲労感が半端じゃない。実は憑き物に魂吸い取られてるんじゃないのか……
「あれ、魔術神は？」
「しまった……俺としたことが」
本当に魔術師なんだな。
「結界を張ったまま、張った外に瞬間移動はできない」

つまり、奴はどこかに隠れているというわけか。
俺達3人は手分けして探すことにした。俺は北側を。ハルコは南東を、安倍は南西を。といっても、頂上付近だけだが。
頂上付近で十分だったんだ。
奴が隠れた目的は俺たちを分裂することだったんだから。
「うっ」
俺は突然後ろから首に腕を回される。
「やっと、離れてくれましたか。長かかったですね。まあ、オーギュストの作った神具が全滅させられるとは思っていませんでしたが」
「小早川！」
ハルコが俺の名前を叫ぶ。これでようやく俺は状況が理解できた。
俺は人質になったんだ。

人質

不覚……俺はその言葉しか浮かんでこない
「なんで、なんでそんなことをするんですか！　先生！」
ハルコが叫ぶ。信頼していた人に裏切られたんだ。ショックは大きいだろう。
「私の目的を果たすためですよ……」
クックックッといった感じで笑い声を漏らす。これで安倍が動じるわけはないと思うが。
「高原くん、動くな」
高原は前傾姿勢のまま動かなくなる。ダルマさんが転んだの途中で最後の「だ」が突然言われたように。
「田中さんも、動くな」
田中は最初から、動いていたわけではないが、これは「変なまねをすると俺の命はない」と言っているようなものだ。
突然俺の首に冷たいものが当たる。つい、冷たっと言ってしまった。
「オーバーリアクションはあまり得をしませんよ」
ナイフが俺の首に当てがられている。確かに、これがヤクザとかだったら「うるせえ」とか言われて首を切られてるだろう。
「先生、小早川には何もしないでください！」
ハルコが叫ぶ。俺のことをそんなに心配してくれるのか。
「それは、田中さんの返答次第ですね」
安倍は答えない。
「田中さん？」
田中！……じゃなかった、安倍！こんな時にふざけている場合じゃないぞ。
「ちょっといいか、アレイスター」
初めて安倍が声を出す。

「なんですか」
「ちょっと、口の中が寂しいのでな。飴を食べてもいいか？」
「出来るなら、いいですよ？」
　できるものならやってみろ、というような感じで了承する。
　だが、瞬間、アレイスターの表情が歪んだ。安倍が平然と胸ポケットから飴を取り出す。そのまま袋から飴を口に運ぶ
「騙しましたね……？」
「アレイスターが名の呪を知らないわけないしな」
　安倍とアレイスターは知り合いなのか……？それにしてはアレイスターは安倍のことを知らないようだが。
「私のことを知っているんですか」
　アレイスターは少し喜びのこもった声で言う
「ああ、会ったこともあるぞ。まあその時はただのペテン師だと思ってたがな。片田舎で死んだと思ったが」
「あれですか、あれは信者の1人が儀式の仕方を間違えただけですよ」
　平然と言ってのける。もうちょっと、私は復活した、とか言えばイエスの再来だ。とか言われて大騒ぎになるんじゃないんだろうか。
　安倍はまだ胸ポケットを触っている。
　……胸ポケット？そういえば。胸ポケットには初めて会ったときにもらった、孔雀の羽が入っている。
　俺はアレイスターの腕を掴んでいたが、片手を少し放して、胸ポケットに手を入れる。あったあった。
　安倍も俺が孔雀の羽を取ったことが分かったのだろうか。ゆっくりと頷く。
「ところで、お前は魔術神なのか？」
　安倍が話を聞く。時間を稼いでくれるのだろうか。その時、ハルコが少しビクッと動いたような。
「マジシャン・オブ・ゴッド、懐かしいですね。いつの話ですか？」
「お前、高原の師匠じゃないのか？」

つい、俺は声を上げる。ちなみにもう羽はアレイスターに向けている。剣になったときに、瞬間的に刺せるように。
「申し訳ありません、私は魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）ではありません」
どういう事だ？それじゃあ何故アイツはハルコを抱いていた？なんでハルコはアイツを師匠だと思ったんだ？
「魔術神はちょっとあっちの世界でいろいろありまして、代わりに私が来ることになりました」
「なんで、私を騙したんだ」
ハルコが怒声を上げる。それもそうだ。ハルコはあれが師匠だと思って、信頼していたんだ。
「騙した、なんて人聞きの悪い。そもそも私は一言も魔術神です、なんて言ってませんよ？」
確かに、ひとことも言ってないかもしれない。
しばらくの沈黙。俺は相談することにする。もちろん、声を出すわけじゃない。脳内の俺と会議をするわけでもない。
憑き物と会話するんだ。首切り馬と。
これを剣にするにはどうすればいいんだ？
――それは羽に念を込めればいいんだ
念？
――剣になれ……剣になれって念じるのさ
あれ？あの部室棟を襲われたときは、剣にならなかったぞ？
――それは具体的な剣をイメージしないからさ。明鏡止水。落ち着いて、お前の理想の剣を想像するんだ。
なるほど、なら俺が初めてこの羽が剣になった時の奴をイメージしよう。光で、いろんなところに反り返った刃のある剣
風が芝生を揺らす音が聞こえる。
――剣になれ！
「うっ」
羽は見事に剣になり、アレイスターの腹を貫いた。それと同時に拘束は緩くなり、俺は簡単に抜け出すことができた。

「高原！　今だ！」
安倍の声が山の頂上に響く。

前傾姿勢のまま動かなくなっていたハルコは、一瞬こけそうになったが、そもまま体制を立て直し、アレイスターに虎のごとく跳びかかる。
「勇気の炎よ、我に勇気が有らんことを！」
爪に炎がまとい、ハルコはその爪で突き刺そうとする。が――
まるで、電源回路がショートしたような音と同時に、ハルコが吹き飛ぶ。
貫かれた腹を抑えながらしゃがみこんでいるアレイスターの周りを円を描くように、焦げ跡が残っていた。そう、部室棟の結界を壊そうとしたときのように。
「フフフ……　やられました。あなたをただの一般人だと思って油断してましたね」
俺はあくまで一般人だ。首切り馬とか安倍の協力があって、こんなことができるんだ。
少しでも役に立ちたい。そんな一心で、俺はまた馬蹴りを決めようとする。
「やめろ！　今度は本当に馬刺しになるぞ！」
安倍がとてつもない大声で俺に声をかける。アレイスターにいたっては、「そうですよ、やめたほうがいいですよ」なんて、他人事のように喋っている。
悪いが俺は一度決めたことは最後までやる主義でね。勝手にやらせてもらう。馬刺しになろうが、消し炭になろうが関係ないね。
「ぬおっ」
俺がそんなことを考えている間に、いきなり視界が青い空へと変わった。
何者かに軸足を払われて、空中で仰向けになった。

そのまま俺は掌底を背中に食らわされて、そのまま地面に落ちた。
その時確認できたのは安倍が俺を見下ろす姿だった。
――なんでだよ
背中を強打され、声が出ない
「命は大切にした方がいい……選べる状況なら、なおさら、な」
安倍はアレイスターを睨みながら言う。
「アイツは俺に任せて、高原を頼む」
そのまま俺はボールを投げるかのような、華麗なアンダースローで投げ飛ばされた。そのまま俺は気を失ってしまった。最後に聞こえたのは、ガラスが割れる音だった。

「小早川ー起きろー」
ダルそうに呼びかける女性の声が聞こえる。俺の家では女性は俺の母親のみのはずだ。ゆっくりと俺は目を開ける。
視界の前にいたのは、ハルコだった。俺は直ぐに飛び起き、状況を整理する。
俺は、安倍にぶん殴られて、それで気を失って……
どうやら、ハルコは俺の介抱をしてくれたみたいだな。膝枕をしていてくれたようで、太ももの感触はよく覚えている。
「小早川、お前顔が変だぞ。頭を打ったか？」
つい、ハルコの太ももの感触を思い出していて鼻の先が伸びていたようだ……
「い、いやぁ、おはよう」
「おはようって、今は夕方だ。こんばんはだろ！」
突っ込むところがずれてません？まあ、夕焼けを朝焼けだと思っていたのは事実だが。
「ところで、お前は無事なのか」
「無事じゃなかったらあんたなんか置き去りにしてる」
当たり前のことを聞くなと言いたげに喋る。

そういえば、安倍が見当たらない。あとはアレイスターも。
俺はそのことを訪ねてみる。
「アイツならどっか言ったよ。田中……じゃなくて、安倍、安倍もアレイスターを追っていったよ」
ハルコの話によると、あのあと、安倍が簡単に結界を破ってアレイスターを追い詰めたそうだ。化け物だな。だが、アレイスターは瞬間移動の魔法を使ってどこかへ逃げたらしい。
安倍も、俺は奴を追う、とか言いながら大量の羽に覆われて消えていったらしい。忍者らしいといえば忍者らしいか。
「それで、俺と高原は2人きりというわけか」
なぜかハルコはりんごのように顔を真っ赤にする。怒らせてしまったか。
「田中、じゃなかった。安倍は、えらい奴か何かなのか？」
は？と俺は目を丸くする。俺が知る限り安倍はただの一高校生のはずだ。
「いや、アレイスターと話してる時にさ、俺を襲うってことは国を敵にまわすことになるんだぞ、とか言ってたし」
首相を暗殺しに行くとかで国を敵に回すとかならわかるが、陰陽師といえども、一高校生を襲ったくらいで国を敵にまわすことにはならないはずだ。
「あと田中……安倍ってすごいよなぁ」
何故、毎回田中と間違えるんだ？さっきから全部間違えてるぞ。
「初めて会った時から田中って刷り込まれてたからな。ついつい間違えるんだ」
ハルコはそれよりも、というような言い方で
「それしても安倍、かっこ良かったな～。あの足払いから、掌底のコンボ！　痺れる～ッ」
なんで俺がボコボコにされたシーンを抜粋するんだ……俺が惨めだとか思わないのか。
「それにしてもお前は惨めだったな。あんなコンボくらい避けろよ

な」
「どっちだよ！あれは完全に避けられるところじゃないだろ」
「お前も無事みたいだしな。帰るか」
あ、俺を無視するんじゃない、ちょっと待ってくれ。俺も一緒に帰る！帰るから、待ってくれ！ハルコ、カムバッ～ック

つまらない口論

あれから数日がたった。俺はまた部室にいる。この部室がこんなに豪華なのは、ハルコが魔法を使ったからしい。ハルコが聞きもしないのに自慢してきた。

安倍はあれからまだ学校に来ていない。まだアレイスターを追っているのだろうか？

「ほらほら、とっとと解読する。このページが終わらないと今日は帰らせないからな」

コイツは安倍のことが心配じゃないのか。というかなんで俺がこの暗号を解かなくちゃいかんのだ。

ハルコの言い分によると

「これは、魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）がくれた物なんだ。」

なるほど、で、これを解ければ何か分かるかもしれないと。

なら解いてやらんこともない。

俺は紙と本を見比べながら、解読を始める。

……解読……

解読……

――ダメだ。俺にはサッパリだ。安倍はなんでこんなのが読めるんだ。

俺はすこし訳したのをメモった紙を投げ出して、机とキスをする勢いで俯せになる。

投げ出した紙を拾い上げるパサパサっという音が聞こえる。ハルコが拾ったのだろうか。う～ん、とうなり声を上げて、俺の頭をペンの先でつつく。痛い。最悪頭の方にしてくれないか。

「これ、正確なんだろうな？」

そんなに俺の訳が心配か。

「そりゃあ、心配するさ。あまり頭よさそうじゃないし。３５０人中２５０位くらいってとこか。よくそんな頭でこの学校に入れたよ

な」
こいつ、俺の中学の時の成績を言い当てやがった。なんで何人居たのかも知ってるんだ？
俺がこの学校に入れたのは、奇跡的に副教科で毎回評定5を取れていたからな。それで推薦とれたんだ。あと、なぞなぞはとかパズルは得意だ。
「ああ、こんな感じのなら、正確だ」
俺がダメだと感じていたのは、全く読めないからじゃない。一冊の本になっているんだ。こんなのを全部解読しようと思ったら、日がくれてしまう。そんな馬鹿らしいことをやってられない。
「そっか、ならこれは大ニュースだな」
案外簡単に信じてくれたものだ。俺は何も言わずに耳を傾ける
「まずはアイツが訳してくれたところだな。えっと……――」
かなり話が長くなったので、俺が要約すると
3界が乱れて、長い争いが起こる――ここまでは安倍が放してくれた内容と同じだ――そして、いずれかが真の世界となり、独裁者が現れる。独裁者は私欲を貪り、逆らうものは極刑に処されるだろう。
「――まあ、訳された内容はこんなもんだな。もうちょっと先まで訳せれば、全部わかるんだだろうけど」
と、こんな感じだった。ようは、次元をまたいだ大戦争になるってことらしい。
――って、まてまて、こんな、一高校生がおふざけで持ってるような本の内容を信じられるわけ無いだろ。
「それじゃあ、お前は自分たちが魔法少女だったり、たな……安倍が忍者って言うのは信じるのかよ」
「俺は眼に見えるものだけを信じる」
「この本は眼に見えるぞ」
屁理屈を言うんじゃない。どこにも未来を予知する本です、なんて書いてねーよ。

しばらくそんな不毛な口論をしていたが、もちろん決着がつくことなく、また、仲直りすることなく。部活動は終了になった。

空は青とオレンジのグラデーションを作り出している。この時間になると部活動が終わった生徒も多いのか。なかなかの賑わいをみせている。

――お前、眼に見えるものだけが真実とか言ってたな。

話しかけるのは俺に憑いている首切り馬だ。どこかの幽霊や死神と違って、思うだけで話が通じるのは助かる。

ああ。言ったよ。お前、いつまで俺に憑く気だ。

――お前の中がなかなか居心地のいいもんでな。魂が削られるとかそんな事実は決してないから安心してくれ。

本当なんだろうな？それはそれとして、それで？

――じゃあ聞かせてもらうが、お前は俺の姿が見えるか？見えないだろ。だが、お前は実際俺と話している。どうだ？

どうだ？と言われてもな。姿が見えない以上。俺もお前の存在が真実だとは言えないな。そもそもお前は存在しないのかもな。眼に見えるものだけが真実だから。

――なるほど、面白い考え方だな。ハハハッいや、愉快だ

首切り馬は突然大笑いを始める。一体何だって言うんだ。

――安倍の兄ちゃんが俺をお前に付かせた理由もなんとなく分かってきたよ。あの兄ちゃんがな……うん。

突然訳のわからないことを言い始めた。まったく……

立て板に水の如く独り言をしゃべり倒す。安倍がとか、お前はすごいんだな。とか。詳しいことは適当に聞き流してたからあまり覚えてない。

「あの」

少々しわがれた老婆の声が聞こえる。俺は少しビクっと体を痙攣させてから、反応する。あのターボ婆ちゃんの記憶が残ってるから

だ。
「はい、なんでしょう」
そこには白髪でお団子を結って、背が低く、猫背の典型的な老婆がいた。
「お兄さん、もう信号が４回も変わっとるよ。考え事でもあるんかいな？」

"真"魔術神とラブレター？

草木も眠る丑三つ時。俺も寝ようとしているんだが、どうにも寝付けない。俺の家は2階建て1軒屋で、自室は2回のベランダ付きという好位置をもらえた。中学校に入るまで妹と一緒の部屋だったからな。プライベートなんて皆無だった。

昔の人はよく言ったものだな。車が通る音を除けば、本当に眠っているみたいだ。寝よう、寝ようと思うから寝られないんだ。心を無にして。

――そういえばハルコと口論したな。眼に見えるものだけが真実。この持論は絶対に変えない。首切り馬は……まあ、目に見えないが俺は実際に力を使えたしな。信じないわけにはいかない。

俺は一体どうすればいいんだ。

そのとき、コンコンとノックをされた。音からして、木製の扉ではなく、窓を叩く音のようだ。案の定カーテンは閉められていて、何が叩いたのか確認することはできない。虫か何かが衝突したのだろうか？

またコンコンと叩かれる。

仕方がない。空き巣だったりしたら怖いが、興味もある。開けてみよう

俺は窓の向こうにいるものに愕然としてしまった。正確には物ではなく、人なのだが。

「ア、アレイスター！！」

そこには、金髪の、目が青い男――アレイスターが立っていた。

「ちょっと待ってください。私はアレイスターではありませんよ。あなたは小早川さん、だったかな？」

白々しいにもほどがある。そんな事で俺は窓を開けたりしない。

「んー、そうですね。私が魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）であることを証明するには……」

アレイスター、にそっくりの男は、牧師が着る服のようなものの

内ポケットから写真を取り出す。
それをふっ、と息を吹きかけると、男の手から写真は消え、俺の目の前に写真が出てきた。どうも魔術師という奴は派手なパフォーマンスが好きらしい。
「あっ……」
俺は少しの間、写真に目が奪われていた。小学生くらいだろうか、ハルコとあまり容姿の変わっていない男が写っている。ハルコは幸せそうな笑顔をみせていた。俺が見たことのない笑顔を。
俺は反射的に窓を開けようとするが、男に制された。
「そこで結構です。あまり込み入った話ではありませんので」
そうか、と俺は頷く。というか窓の向こうからどうやって声を通らせているんだ。
「私は、いま追われる身となっていまして、ゆっくりハルコ君に会うことはしばらく無理そうです。これは本人には言わないでください。私が来たこともないしょです。話すとぜったいに私を探そうとするでしょうし」
ハルコの性格だとたしかにそうするかもな。俺は考えながら黙って話を聞く。
「そして、アレイスターの事ですが。彼には近づかないほうがいい。彼は死神です」
死神ねぇ。口裂け女だったり魔法少女だったりを見てしまった俺には驚く要素が足りないね。
「死神は生きているものには手を出さないという決まりがあるんですが、残念ながらどの世界にも規律を守らない、例外がありましてね」
そういう意味じゃ、俺なんかも例外かもな。
「そんなわけですから、アレイスターは放っておいてください。それと」
魔術神は少しの間間を置いてから
「ハルコ君をお願いします。彼女を守れるのはあなたしかいません」

なんと陳腐なお言葉。残念ながら俺は守られはするが守れない。力の差で言うとアイツの方が何万倍も強いんだ。
「物理的なものだとそうかも知れませんね。ですが、あなたはハルコ君を守れる。そう信じていますよ。それと、眼に見えるものが真実とは限りませんよ、今回みたいに、ね」
俺には特殊魔法が使えるとかそんなことか？　それと、今回見たいとはどういう意味だ。そんなことを聞こうと思っていた矢先、強い閃光が視界を包んだ。
しばらく目を伏せていたが、しばらくして落ち着いてから見てみると、魔術神はいなくなっていた。

次の日の朝。天気は曇り。雨こそ降っていないが、純白の雲ではなく、少し色の曇った雲だ。こういう天気は気が滅入る。
昨日なかなか寝付けなかったせいか、かなりの寝ぼけ眼で朝を送る。
俺は玄関に行き郵便受けに新聞を取りに行く。いつもなら新聞と保険に入りませんか？なんて高校生に無関係なチラシが入っているのだが、それともう一つ、見慣れぬ青い封筒があった。
俺には文通をする習慣はない。メールだ。つまり親か兄弟、どちらかの手紙だろう。
俺はそんなことを考えながら、郵便物を食卓の真ん中において朝食をとる。
食卓には兄に妹、キッチンには母がいる。父は小３になる前に出張へ行っていて、まだ帰って来ない。毎月１０日くらいに父の写った絵葉書が送られてくるので安否の心配まではしていない。
「この封筒、俊介様って書いてあるぞ」
喋ったのはチラシを読みあさっている俺の兄だ。チラシを読みあさっているのは、うちの家計を支えてくれているというわけではなく――支えているのは当然ながら母だ――大学で卒業論文を書くた

めに必要なんだとか。
俺は兄が何の大学に入っていて、何学部に入っているのかも知らない。というか大学に行っているのかすら謎だ。それでも兄は何故か俺より計算は速いし、博識だ。
俺は礼を言って青い封筒を受け取る。俺に手紙を送る物好きはどこのどいつだ？
裏を返してみると、真ん中に黒い太字で小早川　俊介様と書かれ、その左端にボールペンで”安倍”とだけ書かれていた。
封を切って中身の紙の頭を出してみる。そこには
――この手紙は一人で読んでね
これが最後にハートマークなんて付けてるから最悪だ。そんな俺を見てだろうか
「顔色悪いぞ、大丈夫か」
軽く相槌を打ちながら俺は顔を洗ってくると言って食卓を後にした。
「あれってラブレターだよ、絶対」
「あいつに来るわけ無いだろ、ハハハ」
「俊介兄ちゃんの反応は絶対にラブレターだった！　トイレまで手紙を持ってくる必要あるとおもう？」
「それもそうだな。蓼食う虫も好き好きと言うしな……ハハハ……」
「もし俊介兄ちゃんの彼女が可愛かったりしたら、どうする？」
「迷わず撲殺だな」
あの、全部聞こえてますよ？それに安倍は美少年だが美少女じゃない。
言い訳を考えておこう……くそっ。

手紙

俺はあの悪魔、兄と妹に恐怖を覚えながら、手紙を開く。そこにはご丁寧にも、時候の挨拶から入っていた。

”小早川俊介様

いつしか春もなかばを過ぎましたが、お体にお変わりありませんでしょうか。私は走って走って健康な体を貫いております。

と、まあおふざけは置いといてだ。いくつか報告することがあるのでここに記す。

まず、アレイスターと魔術神が別人であること。俺も直接魔術神とコンタクトを取ることに成功したが、アレイスターとそっくりでビックリしたよ。一応念を押しておくが、双子とかではないぞ。このことは直接会って話そう。

第二に、今日中には学校に戻れそうだ。当然分かっているだろうが、今まで学校にいたのは俺が使役している式神だ。式神が結界の役目をしているはずだからほかにあやかしが寄ってくることもなかっただろうが、お前らが無事でいることを切に願う。

第三に、これが最後の報告になるが、お前を戦争に巻き込むかもしれない。冗談とかそういう事ではないから、よく考えて欲しい。命が惜しいならこのまま俺らと縁を切ってくれてもいい。これは急を要する。放課後までに決まりそうになかったら、縁を切る。そういう事にしてくれ。

友達じゃないからとかそういう事じゃない、命は大切にしてくれ。特に選べる状況ならなおさらな。

最後に、眼に見えないものは真実ではないわけではない。それのようにな

急急如律令――かしこ”

かしこ、って女性しか使っちゃいけないんじゃなかったか？それに、この急急如律令はなんなんだ……

大きい方にしてはあまりにも長い時間トイレに居る。ちなみに、急急如律令っていうのは陰陽師の手紙の最後に付ける決まり文句だそうだ。首切り馬（それ）が教えてくれた。なんで馬なのにそんなに博識なんだ？

縁を切る……考えたことがなかったな、そんなこと。陰陽師や忍者、なんてやってるから、そういう事はよくあることなんだろうか。

……いかんいかん、安倍が陰陽師だからなんだ、忍者だからなんだ。アレイスターが死神だからなんだ。俺は俺、安倍は安倍じゃないか。

――それに俺にはハルコ、あとは見えないけど首切り馬だっているしな。

突然扉がノックされる。

「俊介兄ちゃん～、便秘だったっけ？」

明らかに笑いをこらえた声で言われている。まだラブレターと思っているのか。

「あ、ああ、ちょっとぼうっとしていたよ」

ハハ、と乾いた笑い声を上げたが、どうやら俺は墓穴をほったらしい。

「デートプランでも考えてたのかな～？」

だんだん腹が立ってきた。

俺は扉を勢い良く開く。鈍い音がしたので一応妹にはヒットしたのだろう。鼻頭を打っていればざまあ見ろだ。

「お～い、明美？」

おかしい、妹の姿が見えない……
まさか、まさか妹も忍者なのか！？
そんな馬鹿なことを考えていたとき、突然右側から高速で隕石のごとく何かがぶつかってきた。俺はラグビー選手よろしく、数メートル吹き飛ぶ。
ぶつかったのは扉だ。忍者、ではなく妹が鼻頭を赤くして笑顔と共に扉の後ろから姿を表した。
――不意打ちなんて１０００年早いよ、俊介兄ちゃん

今朝の妹との戦闘のせいでかなり体力を消耗して朝登校してしまった。あの戦闘のせいで登校時間はぎりぎりになるわで最悪だ。
寝不足のせいもあってか授業は全く耳に入らない。だが寝るわけにはいかない。
実は入学当初、担任の好意で、まあ俺からすれば迷惑一行為（、、）だが、個人面談があったのだ。
俺は推薦で通ったこともあってか、これからは真面目に授業を受けて平均点以上を維持しないと、下手をすれば留年するかもしれない。と脅迫を受けたのだった。助け舟のつもりだろうが
「とりあえず、授業で居眠りさえしなければ赤点は取らないだろうがな」
と、謎の校則の抜け穴的な事を聞かされてしまった。この学校の赤点はそんなに低かっただろうか、それとも平常点をつける基準が激甘なんだろうか。
そんなこんなで確実に定期考査で平均点を取れないであろう俺は、体にムチを打って、この物理教師の催眠音波と戦わねばならないのだ。
俺は、確実に安倍とは縁を切らない。それを考えれば余裕だ。
余裕のはずだ
余裕……

よゆっ
４時限目の終了のチャイムが鳴る。俺は風呂場で石鹸を踏んだように見事に転んだ。
教室が爆笑の渦に包まれる。
ああ、眠りそうになっていたことがバレたか……
「小早川」
物理教師が俺を疑いの目で見る。アイツには俺はどういうふうに映っているんだろうか。寝ぼけている？それともチワワのような弱々しい俺？
「椅子のネジが外れているな、あとで交換しなさい」
俺は状況がつかめず、適当に生返事をしてから立ち上がる。
俺の目線の先には
――ネジを持った安倍が俺をニヤニヤと見ていた。

よろしく

俺の結論は当然、お前について行く、だから縁は切らない。言うのは簡単のはずだ。それなのに、俺はその話題を切り出せずにいた。

つまらない雑談。昨日あったＴＶの話、教師に対する愚痴。安倍はそれを興味なさそうに相槌を打っている。

俺も話すことが尽きてしまった。安倍は黙々と弁当をたべている。

沈黙、沈黙がこんなに辛いものになるとは……説教を受けたときに何も反論できない時よりも辛い。俺も弁当に箸をつけようとする。

「小早川、命は大切にした方がいい」

安倍が声をかける。重鎮な面持ちで。しかし、口に物を含みながら喋るんじゃない。あまり本気に感じられないぞ。

だが、今日はじめて声をかけられた。

「話したいことはわかるが、口に物を含みながらモノを言うんじゃない。行儀が悪い」

安倍は謝りながら口に入った飯を飲み込む。のどを鳴らす音が美味しそうだ。

「それに、そんなことをあまりいうとありがたみが薄れる」

「耳にもたこってな。それで、決めてくれたか？」

それは当然、俺は笑顔を崩さずに言う。

「当たり前だろ、俺はお前についていくよ。今さら縁をきれって言われても困る。クラブメイトだろ」

「お前、それで本当にいいのか？　命は欲しくないのか」

本当に俺を心配しているのだろうか、安倍は声を低くしたまま喋る。

「命は惜しい。だけど、お前がいる、高原がいる。俺はお前らを信用してるよ」

安倍は少し驚いた様子を見せながら、顔を笑顔に戻す。いつもの笑顔だ。

一言も発せずに、安倍は俺に手を差し出す。俺も、アメリカ大統領に引けを取らないスマイルでそれに応じる。
「また、よろしく」

「燃やした！？」
トレジャーハント同好会の部室に俺の怒声が響く。鉄筋に反射しているのか、金属のぶつかるような高い音が耳に痛い。
「いやぁ、自分も昨夜一人で暗号解読してたんだけど」
ハルコはあまり悪びれずに、後ろ頭をかきながら言う
「そこで、ここを火で炙れっていう暗号があったんだよな、それでちょっとボヤっちまって……」
ボヤっちまって、ってなんだ、ボヤっちまってって。
俺は安倍も帰ってきたことだし、暗号解読も捗るだろうと、楽しみにしていたんだが？
「そんな顔するなよ～、それにあれ、偽物だったらどうするんだよ」
「お前、あれは本物だって言ってなかったか」
はあ？　といった感じで「そんな訳無いじゃん」と速攻で否定された。昨日の口論は一体なんだったんだ。
俺は無駄なことで不眠症になりかけたことを嘆き、頭を抱えて座って、あ～とかう～とか唸っていた。
「燃やしたのは俺だ」
安倍がハルコに聞こえないように喋る。
「依頼されたのは魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）からなんだが」
俺は顔を上げる。どんな理由があったんだ。
「アレイスターの狙いは、その本だったんだよ。その本には本当に未来が書いてある。それを使って戦争を引き起こそうとしていた」
つまり、あの目出し帽はその本が目的だったってわけか。なら警察が来ずに、自体が収束したのもうなずける。
それにしても戦争だって……？　アイツは何を考えてるんだ？

「というか、どうやって燃やしたんだよ」
式神を使ってページを差し替えた。とサラリと言ってのける。そんな高度な技が使えるのか……
なら、今日あった数学の抜き打ちテストのやつを差し替えて欲しい。そんな指のことを話してみるが、いろいろと勉学に対する心構えの説教を住職のように3分ほどうけてから却下された。
「それで、アレイスターは戦争を起こして何をしようって言うんだよ」
俺は話を戻す。説教を受けるのはもうこりごりだ。
「噛み砕いていうと、3界、それと人間界を征服することだな」
それはそれは、とても夢のあるおはなし……じゃない、征服だって？冗談じゃない。
アイツはナチスドイツがどうのとかいってたからな。民主的なやり方はしないだろう。
「そもそも、征服っていう時点でそんなこと望めだろ」
安倍は剣の切っ先のように鋭いツッコミを返す。何もボケれねえ。
「お前ら、何をこそこそ話してるんだよ、私も入れろ」
ハルコが言う。そういえばこいつの話から始まったんだよな。こそこそ話。
安倍が咳払いをして切り直す。
「ああ、そうだな、そろそろ本番に入ろう。白板！」
安倍が指を鳴らしながら大声で叫ぶ。すると、部屋の奥の窓の右側の扉から、男ふたりが白板を運んでくる。そこにも部屋があったのか……。というかどこに隠れてたんだ、お前ら。
「安倍ー、お前何者だよ！男色家？」
突っ込むところが多すぎる！！、とりあえず俺は安倍が忍者で陰陽師であることを簡潔にハルコに伝え、安倍がさらに補足する
「男色家ではない」
安倍はかなり顔をしかめている。まあ、俺も――男色家の肩には申し訳ないが――男色家と言われてもあまり嬉しくない。

「そっか。うちのクラスの腐女子にモテそうだと思ったんだけどなぁ」
腐女子だけじゃなくて、安倍は多分女子全般にモテる。というかなんで腐女子に的を絞る必要があるんだ？
「お前、腐女子……なのか」
ハルコはアゴに手を乗せながら
「私は違うよ、人の趣味にとやかくいうわけにはいかないけど、ちょっとね……」
ちょっと、嫌悪感を示しているらしい。眉をひそめている。あからさまに否定をすればもうちょっとからかえたんだが。
もう一つの可能性も考えられなくもないが、これは本気で引かれかねないので黙っておこう。
――ウウンッ
少しオッサン臭さの交じる咳払いがなされる。安倍だ。いつの間にか指差し棒と、黒マジックを持っている。
「本題に入りたいが、いいか」
俺らは黙って席に着く。安倍はよろしい、と呟いてからマジックで書きながら、話をすすめる。
「まず、アレイスターの事についてだが、あれは魔術神とは別人だ。」
「しつもーん」
ハルコがピカピカの小学1年生のように手を綺麗に伸ばしきって言う。本当に小学生なんじゃないのか。
「はい、高原さん」
安倍もなりきっているのだろうか、先生のように指をさしながら、柔らかく言う。いつもは呼び捨てじゃないか。
「なんでー、魔術神とあれいすたーはー、そっくりだったんですかー？」
せめて、全部平仮名になるような発音をするんじゃない。なんで魔術神だけは発音できるんだよ。これから全部お前の発言を平仮名

にしてやろうか。
「いい質問ですねぇ、アレイスターは死神です。そこから語っていく必要がありますね。」
お前は一体誰になりきってんだよ。死神については、まあ俺も気になる。
「死神って言うのは、魔界の住人ですね」
「あー、質問」
俺はシャキっと高校生らしく質問をする
「なんだよ」
あれれ？なんか俺にだけ風当たりが厳しくないですか？
「お前や高原みたいな、魔法使い？魔術師？マジシャン？」
「とりあえず魔法少女って言っとけよ」
ハルコから突然のフォローが入る。なんで俺に向かって喋るときだけ元に戻る……
「その、なんだ、お前とか高原みたいな魔法少女はどこの住人なんだよ」
「俺は此処の住人だが、魔法少女は……」
と言って安倍は白板に三角形を書き始める。その右上辺りに丸が描かれる。その円を指し棒で示しながら
「この三角形が3界を表しているとすると、魔術師が住んでいるのはこの円の位置だな」
「へぇ～」
ハルコが感嘆の声を上げている。お前の住んでる場所だぞ。そんなことも知らなかったのか？
「恥ずかしいことだけど、次元移動の定理はまだよく理解できてなくてな」
なんだ、その数学の用語みたいなものは。
「天界、冥界、魔界、人間界、そして魔術師の住む空間とかを移動する定理みたいなもんだな」
「とかってなんだよ、とかって。ほかにも世界があるのかよ」

「ああ、宇宙と似たようなものだからな。俺も把握しきれてない」
ああ、お前に把握できないなら俺には理解不能な世界だな。まったく。
「ところで、魔界の住人とやらは、簡単にこっちに来れたりするのか」
「次元移動の定理を理解できているのなら、誰でも簡単にできるはずだ」
誰にでも……か、それがこの世界でも出来れば大ニュースだな。
「まったくだ。この世界の文明が進むの遅すぎなんじゃないか」
おい、安倍、お前もこの世界の住人だよな？
「誰にでもできる割には、あまり、死神なんて話題になってないが？」
「ああ、それなら簡単だ。大抵の鬼（モノ）は悪事を働くために、やってくるようなものだからな。それを世間一般に知られたら大暴動が起きるだろうからな、魔界から住人が来れないように対策しろってな」
「無理だっての。入り口なんてどこでも作れるんだから」
2人でこの世界の文明が低いと詰っているように感じた俺は、人間界の住民として止めに入ることにした。
「それで、なんで俺達がその鬼の存在を知らなかったんだよ」
「要は、俺達が記憶を消してた」
「つまり、俺達は本当は鬼とあったことがあるけど、その記憶が消されてるってことか」
安倍は頷く。
「ああ、ちなみに国はこのことを知ってる」
かなり重要なことをさらりと言ってくれるな、コイツは。
「じゃないと俺達の存在意義が薄れるんだがな」
陰陽師っていうのはたしか、悪霊退治よりも占いとかのほうが貴長されてたんだっけか。
「ああ、本来は占いなんかを先行する職業だったはずなんだがな。」
「それじゃあ、平安時代から幕府なんかは存在を知っていたという

ことか」
「それは知らん。俺が物心ついた時からそんな仕事をさせられていたからな。あ、これ国家機密だから、ほかにしゃべると命があぶないよ」
お前が物心ついた時って……たかだか１０年か１１年だろ。
それに、命を狙われるような国家機密を一般人に漏らしてんじゃねー。
「おうい、まだ私の質問に応えてもらってないが？」

死神講座

そういえば、なんでアイツが魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）とそっくりだったのか。そんな質問をハルコはしていたな。

「そうだよ、お前が国家機密とか与太話をするから質問に答えられなかったじゃないか」

「くぅっ……」

俺とハルコは間髪を入れずに抗議をする。あんなおふざけでこの世界を解説しようとするな、とか、とりあえずお前もなんかふざけてこの質問してたじゃねーかとか。まるで国会のようだ。

「あー、コホン――仕方がない。君たちがそういうならマジメに話してやろう」

さっきまでは真面目に話してなかったのか――とヤジが飛んでいく

「まあ、まあ、落ち着け。まずはだな、多分、なんだが、死神は魔界の住人……とは言ったよな？」

確認を取る質問ではなく、確実に私、鍵閉めたかしら？のニュアンスだ。とりあえず、そこだけ。そこだけ聞いたと相槌を入れる。

「ああ、そうか。つまらん世間話を間に挟んだからな。ちょっとドわすれしちまったよ」

自業自得だ――というか、国家機密をよくつまらん世間話で片付けられるな。

「それで、さっき白板に三角形と円――3界と魔法使いの住処を書いているな」

安倍は白板を指し棒でさす。

「それで、ここ、この頂点は魔界だ。さっきに行っとくが、これは優劣とかではなく、位置を示している」

ああ、なるほど。俺はてっきり頂点が天界だと思っていたよ。ちょっとした認識の相違ってやつだな。

安倍は黒マジックで頂点の上に”魔”とワープロのフォントのよ

うな字で綺麗に書く。俺は字が汚いから、こういうのを見ると少し嫉妬しちゃう。しかも、よく見ると、三角形とか丸とか、全く歪んでないな。

安倍は書き終わると話を続けた

「そこで、ここ。魔法使いの住処」

”魔”と書かれた右にある、きれいな丸い円の中に、またまたきれいな字で”術”と書き入れる。

しかも、三角形の周りに、いろいろな記号を書き並べる。

四角形や楕円、バツ印に米印、星マーク……それらも全部完璧にずれがないように見える。星マークを陰陽師だからだろうか、六芒星のように書いている。

これで、というような感じで俺らを見据え、

「さっき書いた世界以外にこんな感じで次元がある。名称なんかは省かせてもらうが、大体は宇宙の銀河系のように一つの塊になっている」

テンパッた新任数学教師のように、安倍はせわしなく指し棒を動かす。

「それで、世界が近ければ近いほど、住人の性質も似てくる」

なるほど、だから、ハルコはこんなに人間に近いのか。

「そうだ。首切り馬とかも馬にそっくりだろ」

俺は確かに、と頷く。

「ハルコもそうだが、首切り馬はこの世の馬とは似て非なるものだ」

首を切られた馬の魂じゃないのか

「この世で死んだら、魂は元の、無傷の状態で離脱する。修行をしたり、その後の私怨が強かったりすると、その場から離れなかったりするんだが、基本は冥界に落とされる。だから、似て非なるものだ。この世のものじゃないから、物理的作用を無視して、力を作用させることができる」

この世のものじゃないから、なんでもできるっていう言い方ならいくらでも出来る。できるが、そうじゃないと納得ができない……

強引に自分を納得させ、話の先を促す。
「で、その死神は、人間と魔術師に近い。そして、そういうこの世に残った魂を、”あっち”に運び出す、という仕事があるんだ。そこが重要なんだが」
何が重要なんだ。話が長すぎて頭が混乱してきた。
「ちょっと待ってくれ、よくわからなくなってきた」
俺は混乱した頭ではどうも理解出来ないと、話を切り直してくれ、と頼む。
「そうだな、高原も混乱してきただろうし……」
安倍の視線が止まる。その先には、まるで現代文教師のありがたい解説を、我関せずといったように眠るハルコがいた。
「彼女は頭がいい、気にせず進もう」
これで俺と安倍のワンツーマンでの授業が始まった。女性ならまだしも、なんで男と二人っきりで話さねばならんのだ。――くそっ
「それでは、一度整理してみよう」
整理という名のクイズ大会が始まってしまった。
「この3角形の世界の正式名称を時計回りに」
魔界、冥界、天界
「右上にある円は？」
魔術師の住処
……ほんとうに意味があるのだろうか、そこら辺はすでに分かっている。俺が切り直して欲しいって言ったのはそこじゃない。
「おい」
「なんだい」
「楽しそうにクイズを出すのはいいんだが、俺が聞きたいのはそこじゃないんだ。死神の部分を分かりやすく説明してくれ」
そこまで分かっていたのか、とアメリカンコメディ並のオーバーリアクションで驚かれた。なんだか馬鹿にされた気分だ。
あの時に断っておけばよかった――
「死神だな。死神は人間と魔術師に近い、そして魂を狩るのが仕事

だと説明したね」
　そこまではなんとか理解できた。魔術師と人間に近いっていうのは良くわからんが。
「簡単に言うと、超能力を持っているってことか。魔術に縛られない、ね」
それならお前も死神なんじゃないのか。
「僕は残念ながら、陰陽道というものに縛られているよ。忍術はあまり魔術と関係ないが、それも細くしておくよ」
「それで、アレイスターは相手の姿見をコピーする特殊能力を持っているってか」
「お前、なかなか飲み込みが早いな」
　今度はなんというか得意になってもいいみたいだな。俺様を舐めるんじゃねえ。
「だが、半分あたりで半分外れ。」
　よくある、お前の回答はここからはダメだから部分点な、っていう奴だったか……
「あいつは全部を写す。アレイスター、あれも偽名だ。本当の名はドレイ・ガサ・カーミイ。すべてを写し者の通り名で、俺らの中では通っている」
　ああ、なんと言いにくい名前なことか。
「それで、対策は？」
　そこまで調べ上げているなら、対策も練っていることだろう。
「そう急かしなさんな。アイツは触れたものを完全に写し取る」
　つまり、触れなければ写されない、ということか？
「それもあるが、アイツは触れたものしか写せない。それを逆手に取るんだ」
　陰陽師であり忍者の安倍はどんな奇策をとってくれるんだろうか
――

当たって砕けろ作戦

安倍はなんてことを考えていたんだ。失敗したら俺の命が狩られてしまう。

安倍が考えたという奇策は、とんだ「当たって砕けろ」作戦だった。

安倍がいうには

まず、アレイスターは触れたものからしか変化できない、しかも、触れたもの1個だけ。つまり、剣があったとする。その剣を俺がアレイスターに向けて斬りかかり、アレイスターがそれを受けると、剣に変われる。しかし、俺にはなれない。

しかし、アレイスターはなかなかの武術の達人らしく、俺の剣の腕では避けられて体を触れられて入れ替わられる。――と、安倍が言っていた。

「これを使う」

安倍が懐から取り出したのは、何本もの糸。これで何をしようっていうんだ。遠距離からカウボーイのようにアレイスターの首を輪に通すか？

「そうじゃない、これは神具だ」

あー、また奇妙な名前のものが出てきたものだ。神様がカレーに入れる具材か。

「で、その神具は一体なんなんだよ」

俺は明らかにひもにしか見えないものを指さして尋ねる。

「まあまあ、ちょっと待ってろよ」

安倍はひもの片方を俺の方に投げる。

「うおおぅ」

俺は奇声を上げる。勝手に、俺の右腕が上を向き、左腕が下を向く。上下が逆になり、そして、腕をクロスさせる。これを数回繰り返す。抵抗は全くと言っていいほどできない。

「こ、これは……」
自分が小学生だった頃、テレビでやっていたせいでかなり流行ってしまった”テンテコ舞い”じゃないか。変な歌も入っててみんなで歌って踊ってたな。
小学生の頃はまだ恥ずかしさも何もなくてよかったかもしれないが、高校生の今になるとさすがに恥ずかしい……。安倍があまりテレビに感心がなさそうなのにこの踊りを知っているのは驚きだ。
「アッハハ、なんだよその踊り」
ハルコが腹を抱えて笑う。こいつは年代が同じくらいで、しかも暇があれば恋愛ドラマの話題を出してくるくせに、これは知らないのかよ！
あ、床に転がり始めた。そんなに俺のテンテコ舞いが面白いか。
あとで何かイタズラしてやろう。夜道には気を付けろよ？
「安倍、そろそろ止めろよお！」
俺は手をクロスさせたり上下させたりしながら、真顔で言う。
「アハハハハッ、お前、なんで真顔で言うんだよ。アハハハハッ」
床に転がりながら笑うなよ。ハルコの笑い声はだんだんと大きくなる。これで大声選手権なんかでたら優勝するんじゃないか。
「ち、近づいてくるな！」
違う、俺はハルコに近付いているんじゃない。安倍を止めようとしてるんだ。いい加減に笑い声を止めてくれ。野次馬が来ると困る。
「い、い、か、ら、止めろ！！」
安倍は真顔だ。真顔でもこいつの心は今俺を弄んで楽しんでいる。俺ならわかる。
安倍の真顔が途中で崩れる。こいつも法律が許せばこの場で殺してしまってるかもしれない。
「ああ、ああ、悪かったよ」
明らかに悪びれた顔はしていない。だが、腕は勝手に動くことはなくなった。
「これで分かったか？」

「は？」
俺は完全にからかわれていると思っていたから、何のことだかサッパリわからなかった。
「これの効力だよ。とりあえず、可動式のものなら糸吊り人形のように動かせるよ」
安倍は手のひらを俺に見せる。手のひらの腹の部分からスパイダーマンのように銀色に光るタコ糸が垂れ下がっていた。
俺を実験台に使っていたわけか……
「まず、お前を殴りたい」
「そう、あせるなよ。ここからが重要なんだ」
安倍はさっきも言っていたが、神具――オーギュスト・ロダンが作った天使の武器、らしい。こいつの名前は糸吊り人形（マリオネット）――でアレイスターを騙すらしい。
「これがセットだ」
また指を鳴らし、安倍は奥の部屋からイケメンがテレビで見るような台を持ってきた。
台の上には、少し俺のものにしてはピチっとしているだろう、青ジャージ、マネキンから分解したのだろうか、腕の模型がある。かなりリアルで少し気色悪い。
「まずは、小早川、お前がこれをつけるんだ」
俺はきっとジャージに何か結界でも張っているんだろうと思い、渋々ながらも、着てみる。
「見事にピチピチだなあ、体のラインが浮いて見えるぞ」
ハルコが馬鹿にしたように言う。体のラインを気にするのは女子だけだろ。それに俺はそんなだらけたボディじゃないぞ。
「それじゃあ、腕をジャージの中に引っ込めてもらえるか」
安倍のよく分からない支持に俺は怪しみながらも従う。糸吊り人形の件もあったから、完全に信用したわけではない。ここまで物を用意されていると、なんだか申し訳ない気分になるのだ。
「こ、こうか？」

俺はジャージの袖に手を引っ込めてから安倍に尋ねる
「いや、全部ジャージの体の中に収めてくれ」
腕を移動しながらというのはなかなかきついものがあるな。まるで芋虫になった気分だ。ジャージの中でもぞもぞと手の位置を調整しながら、楽な位置に置く。
「それじゃあ少しきついかな。もうちょっと、中に何も入ってないようにみせかけて」
腕の位置を体の真横に動かす。手の型が浮くということらしいので、ズボンの中に手を入れる。くそう、これに何の意味があるんだ。
「うわー、これからどうするんだよ」
安倍は台の上から、妙にリアルで気色の悪い、腕の模型を持ち上げて
「これを使うんだ」
安倍は俺のジャージの袖に人形の腕を通す。ハルコは完全に見るきを無くしたようで、帰る準備を始めている。
「ぴったりだな」
いかにも、という感じで絵描きのように顎を縦に動かす。
「これで何をする気だよ」
あまりにも奇妙な行動に俺も我慢ができなくなった。
「簡単なことさ。アレイスターにはこれに変化させる」
安倍は感触を確かめるように、腕の模型を触りながらしゃべる。
「さっき見せたこれ。この糸吊り人形を使ってお前を操らせてもらう」
「またてんてこ舞いを踊らせるつもりか」
安倍とハルコが一斉に吹き出す。お前らそんなに夜道を歩きたくないのか。
「あれは、ちょっとおふざけが過ぎたが、本当はもっと別のことのためのものなんだこれは」
安倍曰く、これはもともと、大量の人形を動かして、天使たちが活動するために作られていたものらしい。

「その応用で、人間も動かせるってわけさ」
「お前、まさかそれで人を殺したりは」
　してない。強く否定された。
「使ったのは今日が初めてだ。それに、俺はまだ人を殺めたことはない」
　悪かった。と俺は謝罪を入れる。なんだかとてつもなく申し訳ない気持ちになった。安倍も、忍者で陰陽師である前に、一人の人間なんだな。
「アレイスターも使ってたよな。それ」
　ハルコが突然に話題に割り込む。しばらく喋っていなかった俺にとってはありがたい助け舟だ。
「ああ、俺もオーギュストにそのことを聞いてみたんだが、盗まれていたみたいだな。俺も同じ(クローン)ものを作ってもらったんだが」
　安倍さんはなんとも人脈が広いな。というか、オーギュストさんとやらは一体何者なんだ。
「武器屋をやっているんだが、詳しいことは俺も知らないな」
　安倍より謎に包まれていそうだ。
「それで？　どうやってアレイスターを倒すんだ？」
「さっきも説明したが、アイツは触れたものからしか写し取れない。つまり、この腕に触れた状態であいつが能力を使ったなら？」
「あいつはこのマネキンの腕になる……」
　理論上はな。と小さく呟く。しっかり聞いていないと聞き取れない声だ。そんな事で大丈夫なのか
「仮定しただけで弱気になるのはいただけないな」
「命がかかってるんだが？……」
「そうだったな、だが、今はもう選べる状況じゃないぞ」
　そう言われると返す言葉がない。仕方がない、話の続きを機構じゃないか。
「それじゃあ、続きだが、それから俺があいつを魔界に送り返す」
「送り返すだけでいいのか」

「ああ、なんてったって魔界だからな。とても愉快なお仕置きをしてくれるだろうよ」
愉快か。あまりぞっとしない話だ。
「あいつに近づくまでは俺がやる。だからお前は俺を信じろ」
ああ、信じるぜ。陰陽師で忍者で――人形使いさんよ

現代風武士

今日はいろいろやることがあるから、と安倍は作戦会議が終わるとそそくさと帰っていった。

作戦会議と言っても一方的過ぎたが。そもそも俺は相手のことを何も知らないから、駒として使われるのは仕方のないことだ。死なない程度に役に立てれば良い。

「小早川ってさ、格闘術どれくらいできるわけ？」

帰り道、俺とはるこは途中まで一緒に帰ることになっている。同じクラスの奴に見られて、からかわなければいいんだが。

「格闘術っていうと、ムエタイとか、空手とかか」

違う違う、あー、でもそれでもいいかも、と、どっちだか分けのわからないことを言っている。

「喧嘩術って言うの？とにかく、人ひとりを殺せるくらいの術は持ってるの？」

あまりにもストレートな言い方だ。残念ながら俺は喧嘩はすきじゃないし、そんな物騒な術は持ち合わせていない。強いて言うならば、この馬蹴りか。

――打ち所が悪ければ、殺せるな。

本当にやってしまいそうだ。あまり怖いことは言ってほしくないな。

「そうか。それじゃあ今から武術を身につけよう。簡単な殺人拳法なら教えられるぞ」

またこいつは恐ろしいことをスラスラと……

「いや、殺人拳法はいい。出来れば剣術を教えてもらいたい」

これは俺の願望でもある。この孔雀の羽の剣、これを使いこなせるようになりたい。

ハルコはしばらく唸りながら考えていたようだが、直ぐに口を開いた。

「しょうがない、剣術はあまり得意じゃないが、教えてやろう」
得意じゃないなら教えなくてもいい。
「まあまあ、特別講師を呼んでやるからさ。こんばんは私ん家に来いよ」
「お前の家って、剣振れるのかよ」
どうやら俺の返事を聞いてないようで、鼻歌交じりにスキップまでしている。俺は一体どうなるんだ。
女の子の家に行けるのは嫌じゃないがな。

電車で行く事２０分。それから徒歩で１０分。ハルコの家についた。家というよりか、邸宅。相当でかい。駅から近いという好条件の上、これだけのデカさだ。こいつの家はどれだけ金持ちなんだ。
「これは私の家じゃない。知り合いの家に居候させてもらってるんだ」
記憶を改ざんしてやってるのだろうか？
「そこまで非人道的なことをするほど、魔法少女は汚れてない！この家は私と同じ魔法使いが住んでるんだ」
魔法使いというから、少し期待していたんだが、今は出張に行っていて居ないらしい。魔法を見せてもらいたかったな。魔法使いも仕事をしているのか。
「基本的に、必要物資は補給されるんだけど、私用で買うものは自分で稼がないといけないからね。まあ彼女が何の仕事をしているかまでは知らないけど」
俺達は門をくぐる。洋画なんかでよく見る、鉄製の棒で何かよくわからない模様が描いてある門だ。
そこから杉の木が並んでいる道を３０秒ほど歩き、やっと本邸にたどり着いた。もんから３０秒も歩くなんてどんな学校でもそうそうないぞ。
「おかえりなさいませ。ハ、ハルコ様、何故ただの人間などを！」

ハルコが扉の前に経つと、もんがひとりでに開く、訳ではなく、誰かが開けたのと同時に、その誰かが甲高い声を響かせる。
甲高い声の主は、だいたい俺と同じくらいの身長で、耳がとんがっている猫目の女性だった。髪は黒髪で、妖精にしては大きい。それに童話なんかでよく聞く緑色のワンピースは着ていない。メイドさんでもないのだろうか。メイド服も着ていない。
「ただいま、これにはちょっとした訳があってね」
ハルコが事のあらましを語る。
「そんなわけで、このままコイツが弱いと死んじゃうから、そこん所頼むよ」
「はあ、そうですか……」
女性は困惑した顔をする。まあ、何故人間を、とか行ってるから。死神とかは知ってるんだろうな。
困惑した顔を変えず女性は自己紹介をする。
「私はここでお手伝いをやってます、フォルティア・オプレンティアです。」
「自分は小早川といいます」
「お話は聞いております。こちらへ」
俺も聞いてた。この人は天然なのか。俺はフォルティアさんに引率されてリビングというべきだろうか、ホールと言うべきだろうか。映画なんかでしか見たことのない西洋風の大豪邸のようだった。
真ん中には階段。左と右の壁には大きな扉が。そしてその上には高そうな絵画が。至る所に高価そうなオブジェが並んでいる。これも支給されたものだろうか。必要最低限とは言えないようだが……
階段を上がってフォルティアさんはその奥にある扉を開いてまた奥に続く。俺もそれに従って付いていく。
一番奥の突き当たりにある扉の前でフォルティアさんは止まる。
「この先に臨時講師をおよびしております。どうぞお入りください」
フォルティアさんが扉お開けて俺をエスコートしてくれる。俺にも欲しいな。こんな美人な家政婦さん。

「あいつにあったらちゃんと事情を説明しろよー。じゃないと知らねーからなー」
ホールに繋がる扉から、ハルコがなにか言っている。お前が事情を説明してくれているわけじゃないとはどういう事なんだ。
俺はフォルティアさんから寒い視線をウケてるのでさっさと部屋に入ることにする。
そこには日本風の鎧に身を包んだ男が仁王立ちをしていた。
「我は天叢雲（あまのむらくも）と申す！　そちの名はなんと申す」
日本式武士の挨拶だろうか。やけに挨拶が古臭い。まあ、剣術を教えていただけるなら、どんな挨拶の仕方でも、返すのが礼儀だろう。
「私は小早川俊介と申します。よろしくお願いします」
俺は９０度は言いすぎだが、深くおじぎをする。
「うむ、私もよろしくお願いもうする」
俺はお辞儀で足しか見えないが、天叢雲もお辞儀をしているのか、金属同士こすれ合う独特の音を出していた。
俺達は互いに見つめ合う。相手は包丁を研磨機で研磨するような音を出しながら、腰につけた鞘より、長剣を取り出す。
「おぬしも剣を抜かれい」
いきなり剣を抜けというのか。師匠になる人間――かどうかはわからないが――と入門すらしていない弟子候補が剣を交えても、瞬殺がいいところだろう。
しかし、眼光が怖い。いかにも道場の師匠といった感じだ。逆らえば斬られるかもしれない。
そんなことを考えていたところで、２度目の怒号が入る。本当に斬りかかられそうだ。
俺は仕方なく、学ランの胸ポケットから孔雀の羽を取り出す。
明鏡止水。俺はあの剣を想像する。すると孔雀の羽は光をまとい、ところどころに、”Ｌ”の反対方向のようなものがいくつかついた剣になった。いわゆる七支刀というものだ。

俺が初めて使った時とは違う剣の形。恐らく、この前本を呼んだ時に七支刀が出てしまったせいだろう。
「ほう、七支刀を使われるか。しばらく見なかったものだな。非常に楽しみだ」
どうやらこの刀はかなり使いにくいものらしい。それでもイメージしてしまったしな。ここからまた変えることは難しいだろう。
すると突然、天叢雲が長剣を頭の上に掲げ、「いざ尋常に、参る！」と叫んだ。
叫んだと同時に、俺の右側から土埃が舞い上がっていた。否、正確には俺がもともと居た場所だ。俺の右前方には天叢雲もいる。超反応というわけでもないようだ。口裂け女とあったときにもこんなことがあった。
――危なかったな。まあ、俺の動体視力にはかなわなかったみたいだが。
首切り馬が喋る。おまえ首がないのにどうやって見てるんだよ。
――首じゃなくて、足に目があるかもしれないぜ？
ちょっと悪寒がしてきた。
――あまり無駄話をしている場合じゃないみたいだぜ。俺が全力でサポートするから頑張りな！
天叢雲はこっちを向きなおってまた語りかける。
「なかなかのフットワークですな。ならばこちらも」
天叢雲は俺に向かって跳びかかる。俺はそれを無意識に避ける。正確には首切り馬のサポートだが。
天叢雲の”フットワーク”という、少し現代風な言い方に違和感を持った。だがそんなモノを解決しようとする暇もなく、天叢雲は俺に襲いかかる。
首切り馬は俺に剣を構えるようにと語る。
もしかしたら稽古をつけてくれるのかもしれない。俺は無意識に跳びながらも剣を構える。構えたときには部屋の隅に追い込まれていた。

「それがあなたの剣術の構えでござるか、非常に滑稽だ」
時代劇なんかでよく見る高笑いをしながら、斬りかかる。俺はそれをどうにか七支刀で受ける。
とんでもない怪力で、俺の腕は簡単に押し戻されてしまい、自分で七支刀を首にかける形になった。
「それをそのままずらせば、お主の首を跳ねることができますな」
天叢雲の高笑いを止めない。本当に殺されそうだ……
「これは一体、何の稽古なんだ！」
俺は殺されそうになって頭がおかしくなったんだろうな。そうだ。荘に違いない。
天叢雲は何故か高笑いを止め、ぽかんとしている。
「稽古とはどういう事でござるか」
今度は俺がぽかんとする番だ。話が食い違ってないか？
「いや、俺はあなたに剣術の稽古をつけていただこうと思って、あなたに会いに来たんです」
「そういう事でござったか……どうも早とちりしてしまったようでございますな」
男派遣をおろし、鞘に戻す。俺も気が滅入ったせいだろうか、七支刀は孔雀の羽に戻っていた。
「私を召喚するものは、たいてい剣術を試すために拙者を召喚されるものでござるから。ついいつものタイプかと思った次第でござる」
たまに、横文字が出るな。武士はたいてい横文字が苦手だと相場が決まっているはずだが。
「時代は流れるのでござる」

七支刀

俺と天叢雲の誤解は解け、とりあえず剣を教えてもらうことになった。

「私が使っているのは十握剣（とつかのつるぎ）と言いましてな。昔は伊邪那岐命（いざなぎのみこと）が使っていたとされる剣でござる。１０個分ほどの拳をならべたほどの長さの剣だから、十握剣」

鞘から、剣を取り出しながら語る。

はあ、なるほど。それじゃあ戦い方はどんな感じなんだろう。

「戦い方は、リーチを生かした突きと、遠心力を利用してたたき斬るのだ」

遠心力か……考えたことがなかったな。

「この剣、ええっと、七支刀だっけ？はどういう剣なんだ」

ちょっと見せてもらえるか、と天叢雲は言い、俺は孔雀の羽を取り出す。

「この羽根は素晴らしいでござるな。望んだ刀をすぐ具現化できる。それを使えるおぬしもなかなかの実力者なのやも知れぬ……」

褒められたのかよくわからないが、未来はあるって言うふうには解釈できるな。

天叢雲は羽を七支刀に見事に具現化させてから、また続けて語る。

「うむ、で、このお主が具現化させた刀は七支刀、ななつさやのたち、とも言うでござるが、六叉の鉾として当時は伝えられてきた剣でござる――」

しばらくは天叢雲の七支刀の講釈が始まる。俺はこの解説の意味がよくわからないが、眠かったのだが、眠るわけにもいかず、夢と現実の狭間を行き来していた。

この講釈は、小一時間ほど続いた。

「――と、いう訳でござる。分かったでござるか」

俺は夢の世界を駆け抜けそうになったときに、突然問いかけられ

たので、あたふたしながら無理にでも答える。
「あ、ああ。俺にはちょっと難しかったな」
「そうでござるか……分かりやすく説明したつもりだったのだが」
相当な時間考えた講釈だったのだろうか。いかにも残念そうに、天叢雲は言う。
大丈夫だ。俺が悪いだけなんだ。真面目に聞こうと思えばあなたの話はきっとどっかの日本史教師よりは分かりやすい話になることでしょう。
「うむ、少し話し込んでしまったようだな。お主の話から考えると、あまり時間もないに等しいのだろう？」
そういえば、作戦決行日は聞いてなかったな。それとも、まだ決められないのか……
いずれにしても近い内に、作戦を実行しなくてはならないだろうな。
天叢雲が入ったことに同意する指のことと、感謝の言葉を告げ、俺は頭をさげる。
「いやいや、頭をさげることはなかろう。剣術を教えるなど幾年ぶりかな。それも短期間となると、実践的な技を教えないといけない。腕がなるわい」
話術だけではなく、ちゃんとした武術を教えることにも長けているようだ。これは期待ができそうだ。
「実践的な技って例えばどんなのですか？」
俺は尋ねる。とりあえずどんな技なのか知っておきたい。
突然、俺の首の右側に七支刀がつきつけられる。丁度”L”の剣に挟まれる形になった。
「これで剣を置くに引いても手前に引いても、はたまた右側に引いても、お主の首は跳ぶ。このようなものだ。これは少々高度な使い方だが」
声が出なかった。俺としては、「おみごと」とでも声をかけてやりたかったが。

「そういえば、お主、基本的な構えが出来ていなかったな。構えというのは大事だ。まもりと攻撃を両方とも兼ね備える」
俺は感心しながらその話を聞く。聞きながら自然と実践に入っていた。
教え方はよくあるゴルフレッスンみたいな感じで「足をもうちょっと開いて」とか「剣をもうちょっと傾けるイメージで」とかそんな感じだった。イメージ、というのは、まだ俺は七支刀を返してもらっていない。
だが、何故か俺が七支刀を持って、構えている姿が思い浮かぶ。
「どうだ、自分が剣を持っているイメージは想像できたか」
「ああ、はい」
イメージが湧いてきたところで、声をかけられたからか、生返事になる。師匠としてでもかなりすごいみたいだ。天叢雲先生。
「本当はこれから素振り１０００回でもさせたいところだったんだが」
本当に師匠としてはすばらしい。臨時講師でよかった。
「七支刀の実践的な剣術を教えていこう」
天叢雲先生は俺にようやく七支刀を返してくれた。
「七支刀の最大の特徴は、その横から突き出た剣だ。これによって、単純に深手を負わせることもできるし、攻撃範囲が広がることで、予想外のダメージを与えることが出来る」
「ちょっと引っ掛けたりとか？」
「それも予想外のダメージの一つだな」
うんうんと首を縦に振りながら、言う。
また横文字を使われたことにまだ違和感を覚える。
「それで、今回はこの七支刀の真髄、横に突き出た剣で相手の武器を絡めつつ、突く！　というのを教えよう」
おお、と俺は間抜けな声を出しながら、七支刀を眺める。なんかカッコイイことができるな。お前。
「それじゃあ、今言われたことを想像してやってみろ」

天叢雲はいつの間にか十握剣を構えている。
俺は馬の脚力を利用して、思いっきり跳びかかり、横から突き出た剣で引っ掛けるように、十握剣に斬りかかる。
うまく引っ掛かった。
が、それは数瞬だけであった。十握剣はすぐに七支刀の拘束から逃れ、俺に剣を突きつけられる。
「これは、簡単そうで、なかなかできない技なのだ」
ああ、あと何時間ほど修行をしないといけないのか。

談話

俺は今ホールでやわらかすぎるほどのソファーに座って、紅茶とケーキをハルコと頂いている。
テーブルはガラス張りで、床が綺麗に見える。
修行がうまくいった後だった。
「これ、フォルティアさんが作ったんですか？」
ケーキをほおばりながら尋ねる。
「いえ、これはいただき物のケーキです」
こっちを見ずに答える。そんなに俺のことが嫌いなんだろうか。
「いただき物のケーキで、いただきますってか」
ハハハと下品な高笑いがホールに響く。なんていうオヤジギャグのセンスだ。もう暖かくていいくらいなのに、１２月みたいな寒さだ。
――くぅ、フフフフ
女性の笑い声が聞こえる。ハルコか？と思いながら横に顔を覗かせてみるが、真顔でケーキを頬張っている。もうちょっと美味しそうに食べたほうが、作った人も喜ぶんじゃないか。
ハルコじゃないとすると、このホールに居る女性はフォルティアさんだけだ。
フォルティアさんは腹を抱えて大笑いしている。声こそ余り出していないが、そんなに面白いのだろうか。ちょっと、フォルティアさんのセンスを疑いたくなる。
「布団がふっとんだ！」
ハルコが真顔でいう。もうちょっと面白そうに言ってもいいんじゃないか。
――ハハハハハハ
天叢雲の、下品な笑い声が時代劇の悪代官のように響く。臨時講師なんだからもう帰ってもいいだろ。

それに続けて、また女性の笑い声がさっきよりも大きくなる。フォルティアさんだ。
「彼女、外界に触れたことが余り無いから、そう言うのにまだ耐性がないんだよなぁ」
耐性って何だ、オヤジギャグの耐性なんてもともとなきに等しい。いや、いらないだろ。
「なにか言ってみたら？ポイント上がると思うぞ」
そんなので上がるのか？嫌われてるみたいだからな。少しでもポイントを取れるなら試してみない点はないかもしれない。
俺は恐る恐る、フォルティアさんに近づく。
「あの、フォルティアさん？」
フォルティアさんは笑い声をピタと止め、俺を見据える。猫目で睨まれると意外と精神的ダメージがでかい。俺の周りには眼光で人を殺せそうな奴が多いな。
「ね、ね、ネコが寝転んだ！」
もうちょっと上手い、と思うようなものを言えばよかったが、残念ながら俺にはそんなオヤジギャグのレパートリーはない。というか持ちたくない。
「――」
あれ？笑わない。あいつ、騙しやがったのか。
する突然フォルティアさんは腹を抑え
「すみません……フフフ……ほんとうに面白い、フフフフフ」
ちょっと、押さえ気味に笑ってるのが気味悪いが、笑っているフォルティアさんはとても可愛らしかった。
「お主、もうちょっとひねったほうが面白いぞ」
天叢雲、お前にだけは言われたくない。
俺はソファーに戻る。
それと一緒にフォルティアさんも俺の隣りに座る。心をひらいてくれたのか。
両手に花とはこのことだな。片方は雑草かもしれないが。

「ところで、小早川様は何故、ハルコ様とお知り合いに？」
向こうから話しかけてくるとは。オヤジギャグ恐るべし。
「ああ、俺は、無理やりこいつにトレジャーハント同好会とか言うのに入れられたんですよ」
「へえ、どんなことをなさるんですか」
俺とフォルティアさんはハルコの話題を通して、打ち解けて言った。
「あの、フォルティアさんはどこの世界の人なんですか」
「私はこの世のものではございません」
「じゃあ、やっぱり魔界とか？」
普通の人間じゃなかったのかしら。などと呟いてから
「そこまでお知りになっているのですか」
フォルティアさんは少し悩んだように間を置いてから、また続けた。
「私は、魔法使いの住処の隣にあります、妖精のいる世界。まあ、妖界とも言うべきでしょうか。そこから来ました」
妖怪というと、エルフとか？
まあ、この世の言葉で説明すると、そんなものですね。と愛想笑いを見せてくれた。可愛い。
すると突然、俺の頭に激痛が走った。おもいっきり殴られたのだ。
フォルティアさんも猫目を丸くして驚いている。
「あんまり、調子に乗らないほうがいいぞ」
ハルコが俺を見下ろしている。なにか悪いことをしたか。ハルコの顔には青筋が立っている。
「私をエサに仲良くなるんじゃない！」
それは違う、と抗議のコメントを入れようとするが、言う前に拳が飛んで来る。
「口答えするなー！！」
いや、違うんだ。と、言いたいんだが、口を開こうとしただけで劣化のごとく拳が飛んできそうなのでやめよう。

天叢雲は俺を見ながら微笑している。
「何がおかしいんだよ」
天叢雲は笑みを崩さない。
「お前らはいいコンビだな」
「また横文字を使いやがって」
「時代は流れる」
とりあえず、ハルコといいコンビということはまずないだろうな。口を開けばロケットのように飛んで来る腕があるんだ。お前の目は節穴か。
天叢雲は人形のように笑みを崩さずに、誰に言うにでもなく語る
「小早川殿は、人間的ではない才能を持っている。人間的な才能を持っていないわけではないが。お主の周りに集まるのはそれ故かもしれぬ」
剣術のことを言ってくれるのだろうか。師匠に言われると嬉しいね。
わからないのは何が集まるのかだ。
どこにあるのかわからないが、時計の鐘が１０回なる。まさに映画のような時計の音だ。
「むむ、もうこんな時間か。それではそろそろおいとまさせてもらおう」
天叢雲はソファーから立ち上がり、俺の正面で向かい合う。
「お主にこれを渡したい。また会うことがあれば、その剣が我らを引き寄せるでござそうろう」
天叢雲は鎧の懐から、錆びたナイフのような形のものを取り出し、俺に渡す。
形見的なものだろうか。俺はしっかりと受け取り、天叢雲はいつの間にか玄関から出て行った。
このまま鎧を着て出ていったら、警察に捕まるんじゃなかろうか。
俺は錆びて切れなくなっているだろうナイフのようなものを、学ランの内ポケットに入れた。

宣戦布告

次の日、俺は阿部、ハルコといつもの部室で、机を挟んで座っている。

時刻は午後5時過ぎ。日が傾いて、差し込んでくる西日が目に痛い。

昨日の剣術の修行のせいで体中筋肉痛だし。せいぜい腕だけかと思ってたよ……

「そろそろ、いいか」

安倍が深刻そうに言う。前回のようにおふざけをしながら、「○○講座」とか言うつもりはないらしい。

あの安倍がこんな顔をするのを始めて見た。相当重要なことなんだろう。俺は貯めていたつばを音を鳴らして飲み込む。

「そんなに緊張しなくてもいいさ。多少の緊張は必要だが、過ぎた緊張は体にも、精神的にも良くない」

安倍らしいな。と俺は思いつつ、話の先を促す。

「それじゃあ、本題に入るが……アレイスターがやってくる日付が分かった」

本当か、と、俺とハルコは机から体を乗り出す。

「あ、アレイスターの使者だという奴が今朝来てな、こう告げたんだ」

安倍が何故かアレイスターという、かなり言いやすいだろう単語を珍しく噛んだことに驚きながら、俺は話を聞く

「『明日、私が向かいます、高原と小早川も連れてくるように』とな」

「お前を殺せばあとは敵なしな感じだろ。なんでわざわざ私たちまで呼ぶんだ？」

ハルコが言う。まあ、確かに、俺やハルコでは全く歯が立たなかったからな……

「罠じゃないのか」
続けて俺も尋ねる。
安倍は、まあ、と一度口を動かし
「これで、お前らが来ても不自然な理由は何もなくなったわけだし、作戦も実行しやすくなる。これ以上のチャンスはないだろう」
俺とハルコは何も言えなかった。確かに、俺らはアレイスターの居場所も知らなかったし、俺は所詮駒だ。リーダーがそう判断するなら、仕方が無いだろう。
「それは分かった。で、どこで会うつもりなんだ？」
ハルコがまた尋ねる。
「百万神公園（やおろずのかみ）」
――百万神公園。
俺達が住んでる土地には、都会という環境には似つかわしくない、野球場ほどのデカさの公園がある。
昼は、誰もが利用出来る、微笑ましい公園、なのだが、夜は暴走族や近くの高校の不良集団などのたまり場になり、夜間の利用はできなくなっている。
警備そのものはあまり、厳重ではなく、たまり場になることを避けるのはできなかった。
「あそこは夜間利用は出来ないはずだ。それに、入ったとしても、暴走族なんかが……」
「そんなのぶっ飛ばせばいいじゃん」
ハルコが当たり前だ、というように喋る。お前のぶっ飛ばすはいコール殺す、ってことだろ。そんな簡単に人を殺めることを認められるか。
そのことを言うと、ハルコは「えー」とまるで、ショーか何かで予想していたヒーローとは別の、イケていない怪人が出てきたときのような、声を上げる。
「分からないが、相手は死神だ。人払いの方法があるのかもしれない」

安倍は深刻そうな顔を変えずに言う。まあ、人外だから、意外とそうなのかもしれない。
「集合時間を決めよう」
言ったのはハルコだ。俺は前回ハルコに15分前行動がどうので怒られたことがある。今度は俺が怒れるように30分前にでも入ってやろうか。
「18時にしよう」
「ああ、分かったよ」
「それじゃあボコボコにぶっ殺せるように準備しないとな！師匠を偽った罪は重い」
今日はこれでクラブ活動は終りになった。筋肉痛が抜けるように早く寝ておくか。

待ち合わせ

俺は百万神公園の入り口に１７時４５分。つまり、約束の時間の１５分前には目的地についたのだ。ハルコも文句は言うまい。

まだこの時間は少し日は高い。太陽の反対側には小さく満月が見えていた。

「もう少し落ち着かないか」

声を掛けるのは安倍だ。残念ながら安倍は俺が来るよりも早く着いていた。なんでこいつは約束の時間に３０分とか１時間も早く来れるんだ？

俺には待てない……

女の子とのデートならまだしも、こんなことのためには待てない。絶対に。

こんなこと、と言っても、俺の命がかかっているんだが。

「あ、ああ、悪いな。待つのは苦手なんだ」

俺は入り口の前を右に行ったり左に行ったりしていた。

門の前で警備しているおっさんも、俺を奇異の目で見ている。そういうので我に返るとすごく顔が熱くなる。

ハルコはまだ来ていない。もう約束の時間まで１５分を切った。まさか５分前に来るつもりだろうか。

くそっ、すごく馬鹿にしたい。早く来い、早く来い、早く来い。

時計の秒針が何事もないように、１周していく。また１周、また１周。

もう５５分だ。これで俺はハルコをますます馬鹿にできる。今までの分を全部返してやる。

――

――

……

……
時間は１８時を過ぎたが来ない。電車に乗ったときはあんなに怒ったくせに。
「高原さんは、恐れおののいてしまったのかな……フフフ」
安倍の”さん”付けと、まるでハルコが来ないことを喜んでいるような、そんな口調が気になった。
「アイツは、ビビらないさ。馬鹿だから」
「そうかな？」
安倍は笑みを崩さない。なんか安倍じゃないみたいだな。
「馬鹿っていうやつが馬鹿なんだぞ！」
元気の良い高い声が響く。
時間は１８時５分を回っている。日もかなり傾いてきた。
とりあえず、遅れてきたことを責め立ててやる。
「あのな、お前、いま何時だと思って」
「いやー、悪い、待った」
「いや、待ってない」
俺はなんてことを！　漫画の読み過ぎだ。これで俺が１５分前からやってきた意味が無いじゃないか。こうなると、もう１５分前行動が基本だろ、とか言えなくなったじゃないか。
「そうか、いやあ、あいつをボコボコにするためにいろんなのとと契約してさあ」
契約っていうとそんなに簡単にできるものなんだろうか。そうならテストで１００点が取れるようになる悪魔とでも契約したいね。
「もう超簡単だ。寿命を食わせればその場で契約してくれるぞ」
そうかそうか。それは簡単だな……
寿命が惜しくなければ。
そんなことを簡単だという魔法少女を俺は改めて恐るべしだと思う。
「お前は何年ほど寿命を食わせたんだ？」
「ざっと……５０年くらいかな」

５０年――短い人生になりそうだな。
「魔女は不老だ」
安倍が割り込んでくる。そういえばそんな話を聞くな。
しかし、不老だとしたら、魔法少女と魔女の違いは何だ？
「魔法少女はまあ、名前のとおり、未完成な魔法使いのことだな。それで、魔女は完成した魔法使いだ」
ハルコの解説はありがたいが、全く分からん。全部魔法使いじゃないか。
「お前はアホだな」
こいつ、自分のことを棚にあげやがって……
「アホ、ってどういうヤツのことだ？」
「お前みたいなヤツのことだよ」
反論できない。もうちょっとひねっていってくれたほうが色々理屈で伏せられたかもしれないんだが。そういう考えを持つ奴をアホなんだな。多分。
「難しい魔法を使えるか、使えないかという考えでいいんじゃないか」
安倍は頭がいいな。本当に分かりやすい。
「ところで」
ハルコは身長と同じくらいの、登山用のようなリュックサックを背負っている。
「その中身は何だ」
「これはな、アレイスターをボコボコにするために用意したものだ」
ハルコは不気味に口を釣り上げる。口裂け女みたいだ。実は口裂け女はこいつじゃないのか……
女性の恨みつらみとは恐ろしすぎるものだ。
「そろそろ、行くか」
気づくと日は完全に落ちている。代わりに東から、きれいな満月が見えている。
行くと言っても、入口の前には警備員がいる。いくら警備が薄い

と言っても、さすがに入口から入るわけにはいかないだろう。
それに、側面のフェンスから入ろうとしても、かなりの高さだ。警備員じゃなくても誰かの目にはついてしまうだろう。
「大丈夫さ。使い魔を使って人目を引くから」
使い魔？　式神じゃなくて？
「ああ、悪い、式神でもどっちでもいいじゃないか」
謝ってるのか、反論してるのかどっちなんだ。
でも、その方法なら確実かもしれない。
「それじゃあ、呼ぶから」
安倍は腰を折り、指を地面に付け、人ひとりが入れそうなほどの円を描く。
その円を見ていると、人の足が見えてきた。
すでに人は出て聞いたのだ。円から頭から出てくるわけではないらしい。
顔はどこにでもいそうな平均的な大学生のような顔だ。
その使い魔は警備員に向かって歩いて来る。そのまま使い魔は警備員に話しかけ、どこかへ連れて行く。
「行こう」
言ったのは安倍だ。
俺達もそれに続いていく。俺は安倍に疑問を抱かざるをえなかった。

完全に空は真っ黒だ。都会らしく、星なんてひとつも見えない。
見えるのは完璧な円形の大きな月だけだ。
それに比べ、公園は、街頭でライトアップされているように明るい。たぶん、不良なんかがたむろしてたらすぐわかるんじゃないんだろうか。それとも、あまり検挙するつもりはないのか……
そんなことを考えているが、公園に折れやあべ、ハルコ以外に人がいる気配がない。そろそろ不良がやって来る頃だろうとは思うん

だが。来てもらっても困るが。
「あいつはいつくるんだ？　もう来てもいい頃だと思うんだけど」
尋ねたのはハルコだ。確かに、人はいないが、肝心の待ち人はいない。
公園は、まるで嵐の前の静けさのように物音ひとつしない。
安倍が言うには、アレイスターは時間指定までしなかったらしい。いい加減な男だ。
「恐らく、あいつも昼にやってくるようなことはないと思ったんでな。俺もこの時間のほうが戦いやすい」
忍者だからか？　現代で忍者と言っても逆に目立つと思うんだが。
「満月だ」
「満月？」
「そう、満月はいつの時でも私たちに力を与えてくれる。特に私のような寄るの住人はな」
なるほど、夜の住人か……
夜の住人というと、死神もそんなイメージがあるんだが。
「詳しくは知らん。１００％の力を出して、勝てれば問題あるまい」
確かに、俺はアレイスターを倒せればそれでいいと思っている。
「俺は次元戦争を止めることだな」
アレイスターはそれが目的で俺らを襲ったんだっけか。しかし、今は、アレイスターを待つのが重要なことだ。
安倍は、どこから取り出したのか、この前の作戦会議で俺に着せていた、ピチピチのジャージを俺に渡した。
これ、着ないとダメか？
「お前に全てがかかってるんだ。頼む」
そうだな、魔法少女や忍者と違って、俺は一般人だ。役に立つにはこれを着るしかない。
俺はその場で着替えようとしたが、目の前にハルコがいることをすっかり忘れていた。
「まさか、レディーの目の前で着替える気かよ」

ハルコは顔を赤くしている。そんなに恥ずかしがることないじゃないか。
しかし、さすがに俺もそんな趣味を持ち合わせているわけじゃない。俺は大人しく、公衆便所で着替えることにした。
俺は着替えを終え、また、袖に腕の模型を通す作業を終わらせ、歩きづらいながらももとに戻った。
ハルコはすでにベンチに座ってしまっている。俺も座って待ったほうがいいか。
俺もはるこ野となりで座ることにする。青い光に写されるはるこの顔がとても神秘的に見えた。
「綺麗だな」
ハルコが月に見とれたまま言う。魔女は突きと深い関係がありそうな気がするんだが、どうなんだろう。
「月……か。関係ないわけではないが、今回は私が月の力で活躍することはないかもな」
そうか、と俺はハルコから満月に目線を移す。
月のクレーターは、日本人にはウサギがもちを付いているように見えるらしいが、外国の人間には美女の横顔に見えたりするらしい。死神は果たして、このクレーターを見てどのようなものを想像するのだろうか。案外、「顔にできたシミ・そばかす」なんて答えるかもしれない。それはそれでまた面白い。
「ん……？」
満月の真ん中に、黒い点が見える。飛蚊症にでもなったか？　目には十分気を付けているつもりだったんだが。ちなみに、俺の今の視力は１．５だ。現代っ子にしては珍しいだろ。
目を月からずらしたら、黒い点は見えない。よかった。飛蚊症じゃないみたいだ。しかし、月を見てみると、黒い点が見える。むしろ、大きくなったように見える。今さらアポロ１３号が月面着陸したわけでもあるまいに。それとも、スーパーマンが月に行って何かしているのか。黒い点はだんだん大きくなっていく。さらに、黒い

点はだんだん下方に下がってきているような気がしてきた。
なんだろうか。俺はもうちょっとよく見ようと、月に向かって歩いて行く。すると、何かにぶつかってしまった。安倍だ。
「わりー、よそ見してたからさ」
安倍は軽く会釈しただけだった。安倍は俺を水に宙を見上げ続けている。その先は満月。
もしかして、あの黒い点が見えているのだろうか。
「お前、あの黒い点が見えるか」
俺は安倍に尋ねてみるが、安倍はこっちを見ない。満月の美しさに心を奪われているわけではないだろう。
安倍は突然口を開いた。
「もとより、そっちしか見ていないが」
「そうか、それで、あれは何だ」
「恐らくあいつだろう。それより、もう下がったほうがいい」
俺は安倍が後ろを振り向いて歩き始めたので、俺もそれについていく。さっきの位置よりかなりな距離を離れたが、それでいいんだろうか。
そもそも、死神が空を飛んで来るなんてな。死神なんて、骸骨に、マントで体がないイメージだったが。
「あいつ、だんだん加速してないか？」
いつの間にかハルコが俺の後ろでペロペロキャンディを舐めながら、なにやら言っている。ペロペロキャンディなんて食べてる場合か！
「いいでしょ、別に。まだ夕飯食べてないんだから」
ペロペロキャンディが夕飯になるとも考えられないが。
「糖分補給は大事なの！」
ハルコはずれたことを言っているが、あの黒い点は順調に形を大きくしながらこっちに向かっているらしい。
初めて点を見てから、5分はたっただろうか。俺でもあの天が、影になって、人の形を取っていくのがわかる。

もうすぐそこだ。銃の名手なら、撃ち落とすことができるんじゃないだろうか。

着地まであと5秒！4・3・2……ドーン

人影は、綺麗に公園の真ん中に落ちていき、凄まじい爆音が腹の芯を響かせる。砂煙もすごい。しばらくは目を開くことが出来なかった。

一塵の風がその砂埃をさらっていったとき、俺は驚愕した。

なぜなら……

その人影は――

どっち？どっち

凄まじい砂埃が、公園を包む。きのこ雲とまではいかなかったが、凄まじい量だ。まるで映画だ。

「小早川、剣をどこに閉まっているか、教えてくれないか」

安倍は、砂埃が晴れる前に、安倍が俺に問いかけてきた。俺が、学ランの胸ポケットに閉まっている指を述べると、トイレのほうから、孔雀の羽が飛んできて、模型の腕がそれをつかんだ。つかんだ瞬間、羽が七支刀になった。

学ランから抜いてくるのをすっかり忘れていた。

煙がだんだんと晴れてくる。地面には全く、あんな高さから落ちてきたはずなのに、少しもへこんでいない。

公園が頑丈なのか、それとも、やはり、人外の力が働いているのか。いずれにしても俺にはわからなかった。

それよりも俺を驚かせたのは、落ちてきた人物だった。俺の予想では、魔術神（マジシャン・オブ・ゴッド）の姿をした、アレイスターがやってくるはずだったのだが、そこに現れたのは、学ラン姿の――

――安倍だった。

正確には、安倍の姿をしたアレイスターかもしれない。

だが、それだけで、俺を悩ませる材料は十分だった。もしかしたら、学校にいる安倍がアレイスターで、降ってきた安倍が本物？

考える時間はそんなになかった。何故なら、俺は、降ってきた安倍に向かって剣を振るっていたからだ。最初からいた安倍に、糸吊（マリ）り人形（オネット）に操られていた。

「すまん」

俺は、反射的に謝っていた。何故だろう、まだ、どっちかもわからないのに。

安倍は微小を浮かべているだけだ。安倍は日本刀で俺の剣を受け、そのままにしておく。

安倍の日本刀が、七支刀の横から突き出した剣に引っかかる。俺が天叢雲から習った、内容だと、このまま、剣をひねって、日本刀を安倍から奪うはずだった。

しかし、日本刀は、安倍の手から離れない。そして何故か、安倍が横向きになっている。いいや、俺が、横向きにされたんだ。

七支刀は、あらぬ方向に飛んでいき、模型の腕は、明らかに変な方向に曲がっている。さらに俺は、腕を服の中に閉まっていることによって、盛大に、空中で、３回転ほどしてしまって、大幅に吹き飛ばされてしまった。まだ、公園の地面には芝生が敷かれていなく、あたった部分はかなり痛い。大きな石が転がっていなかったのが幸いだったか。芝生を敷かないと、モンスターペアレントなんかが、やってくるぞ。

「悪く思わないでくれよ」

俺が剣を振るった安倍は、俺を見据えずに、言った。俺を殺さないのか？

俺は起き上がる。体の節々が痛いが、とりあえず、可動部分は全部動く。骨折はしてないようだ。打撲は心配しとこう。

「お前、いつの間に俺を写しとった？」

俺を操っている方の安倍が、まるで、エアピアノのように、指を動かしながら、日本刀を持った安倍に喋りかけた。なんだか、混乱してきた。どっちも安倍なんだ。いや、正確には、どちらかが、安倍で、もう片方が、アレイスターだ。

「俺が、その対策を取ってないとでも思ったか」

日本刀を持っていた方の安倍が、微笑を崩さずに言う。右手には日本刀があり、もう片方の手には、月光を反射して、青く光るものがあった。

その青く光る物は、小さな、裁縫用のようなハサミだった。ハサミで、あのタコ糸を切ったのだろうか。というか、ハサミを持った安倍にはあの糸が見えたのだろうか。俺には全く見えなかったが……

「――そういうことか。なら、もういい。小早川、その場から離れ

ろ！」
何も持っていない方の安倍が、俺に向かって叫ぶ。
そこは危ないから、早く離れろ、という意味ではなく、お前は邪魔だから、早くどけというニュアンスの、怒声だった。
「離れてくれたほうが、俺も嬉しい」
日本刀を持っている安倍が、俺を見ずに言う。そんなに俺は嫌われているのか。
俺は、急いで、痛む体にムチを打ち、模型の腕を押し出しながら、袖に自分の腕を通し、走って離れようとする。
突然後ろのほうで爆発音がした。本日二回目の腹へ響く爆音。実際に、戦争の場に行くと、こんな音がどこもかしこもしているのだろうか。確かにこれはかなり怖い。人が死ぬとかそういう怖さじゃない。雷が、かなり遠くで鳴っているのに、爆音がすると怖い気がするのと似ていると思う。
俺は、怖いが、好奇心が勝ってしまい、立ち止まって後ろを振り向いてしまう。
俺から向かって左側に、砂埃が巻き上がっていた。空から落ちてきた時とは違って、地面に沿って、左側に、もくもくと、動いていっている。何があったのか、一切状況は掴めない。
根元のほうから、土煙がなくなっていく。徐々に、少し削られた地面が見えてくる。さっきまでは平だったはずだが……
徐々に徐々に、視界が開けていき、見えたのは、小さいクレーターとその真中で安倍がニヤリと笑って、立っているだけだった。その小さなクレーターは、半径何メートルとかあるわけではなく、子供用のスコップでちょっと浅く広くほったような感じだった。
「そんな技も使えるとはなぁ」
クレーターの方にいる安倍が、日本刀を持った安倍に、やはり微笑を崩さず、言った。日本刀を持った方も、どっちも微笑しているので気持ち悪い。どこまでコピーしているんだ、アレイスターは。
能力がわからないのか？　なら、今クレーターにいるほうが、ア

レイスターなのか……
その考えたを読まれたのか、はたまた、ただ当たり前のことなのか、クレーターにいる方の安倍が、言う。
「おっと、能力が把握できていないからといって、俺がアレイスターとは限らない。だって、その能力が死神特有のものの可能性があるからな」
それに対抗するように、日本刀を持った安倍も喋る。
「ちなみに、解説しておくが、さっきの能力は、月読（ツクヨミ）と契約していないと使えない能力だ。こんな感じでな」
日本刀を持った安倍が、指を2回鳴らす。すると、2人の安倍の真ん中ほどの位置の地面に、何かが高速で、落ちてきた。しばらくすると、その落下地点には、さっきのクレーターほどの、穴が空いていた。
その何かが、”黒い球体”だということまでは見えたのだが、クレーターを確認しても、何も残っていなかった。
月読って確か、月の神様だよな。月から隕石が降ってきたとか？
というか、それを確実に直撃しているのに、無傷だった方の安倍、すごいな。
「まあ、契約していないと使えないとしても、それが、どっちが安倍かの判断材料にはならないだろう。ああ、アレイスターと会う以前に、君がその能力を見たのなら話は変わってくるが」
確かにそうだ。俺は、アイツの能力を見たことがない、見たことがあるのは、唯一、羽を剣に変えたり、俺に憑き物を憑けてくれたりしたことだけだ。残念ながら、判断材料には成り得ない。
俺が、悔しそうな顔をしていると、事情を察したのか、クレーターの方にいる安倍は、日本刀を持っている安倍を見据え、どこから取り出したのか、俺には見えなかったが、日本刀を取り出した。どう見ても、両方とも同じ刀だ。これで、2人の安倍が入れ替われば、完全に俺には見分けがつかない。
はじめから、日本刀を握っていた安倍が構えをとりながら言う。

「そんなに、能力がわからないから、それは判断材料にならないと言っていたが、それは自分が能力の確認ができないから、言っているように感じるが？」
そうなのか？
「それは、能力を使ってしまって、失敗したということを自白したようにも捉えることができるが！」
問いかけられた方の安倍が、問いかけた方の安倍に向かって、走っていき、日本刀を振りかぶる。振りかぶられた方の安倍が、まるで払いのけるように、刀を振り、受ける。
まるで、刀と刀の間から空気が逃げていくように、突風が吹いた。土の動き方が、その二人の安倍が、突風の発生源だと一瞬で分からせた。
その後、また、2たりは飛び退き、距離を取る。今度は飛んだ。身の丈の3倍ほどか。余談になるが、ノミは、3倍の大きさになると、東京タワーを飛び越えてしまうらしい。人間と同じくらいの身長だったか。今はどうでもいいか。そんな無駄なことを考えていると、凄まじい突風が、俺の頭上から吹いた。刀をまた、交えていた。その刀の間から、また風が吹いていた。
器用にも、安倍達は空中で回りながら、刀を離してはまた、ぶつけ合い、また離してはぶつけ合う、ということを繰り返していた。こいつらは天狗か！。しかも、最悪なことに、俺はどちらがどちらの安倍か、もはや分からなくなっていた。
――いやいや、面白いことになってきたな。
首切り馬が声を上げる。お前、今回はちょっと不謹慎じゃないか。
――そういうな、不謹慎なのは、無関係者が、まるで自分も関係してるかのように言う時だけさ。俺らはかなり重い感じで、関わっているだろう？
お前の言い分が本当ならな。
――アレイスターという男、姿形だけじゃなく、能力まで写し取れるそうじゃないか。安倍のにいさんが太刀を交えるのは面白いが、

２人の阿部のにいさんガ太刀を交えるのはもっと面白い。
悪代官のように、口を大きく開けて笑う。実際には、本当に口を開けているのかは見えないが。そもそも、首がないから、口なんてないはずだが。
だが、確かに、能力まで写しとるなら、戦いも互角に終わるはずだ。それなら相打ち？それとも、別の何かがまた勝敗を分けたりするんだろうか？
――さあな。まあ、これは見物だぜ。見世物なら、ミリオン達成してもおかしくないな。
こいつはやっぱり不謹慎の部類に入るんじゃないんだろうか。
２人の安倍はいつの間にか、地面に降りてきて、また、太刀を交えている。交わるたびに、突風が吹く。ビル風なんてもんじゃないな。
それにしても、俺は、指を加えて、見ることしか出来ないのか。おい、お前、何か策とか浮かばないのかよ。
――無茶言うなよ。俺は諸葛亮孔明のような智将でもないし、安倍のにいさんにかなうような力は持ってない。
馬蹴りがあるじゃないか。
――それで、近づこうとしても、魔をためている間に、ほんとうに馬刺しになっちまう。
お前がそれを言っちゃおしまいだろ。
本当に何も出来ないのか。俺が持っていた、孔雀の羽は、すでに、落ちて、どこかに行ってしまっている。それに、下手に動けば、ミンチになるのは間違いないだろう。
「ん？」
俺は肩をポンポンと叩かれた。ついつい、咄嗟のことで、振り向いてしまった。
肩を叩いた主はハルコだったのだが、その方を叩いた指が、立っていた。
今のが、ナイフだったらやられていたな。

艮、巽、坤、乾

「お前、これが、ナイフだったりしたら、死んでるぞ」
ハルコはまだぺろぺろキャンディーを舐めながら、すこし、からかうように言う。
「んなこたあ、わあってるよ」
緊張してるからだろうか、俺はいつも以上に声がうわずり、滑舌がおかしくなっていた。
「とりあえず、あとで、それの特訓だな。今はどうせやることもないだろ？」
そうだ、今は何もすることはないし、できない。あるとしても、馬刺しになることくらいか。
「出来ることといったら、あいつらに飛び込んでいって、ミンチになってハンバーグにでもなれるか」
こいつは、恐ろしいことをスラスラと……
ハルコは、俺を気にしている様子もなく、背中に背負っている、登山用の背の高いリュックサックを地面に下ろし、プラスチックの留め具を外し、上にかぶさっている蓋を外す。
気になって中を覗いてみたが、たくさんのものが入っているわけではないようだ。底のほうに、お菓子の袋が見える。こんな時に一体何の準備をしていたんだよ。
ハルコはゴソゴソとリュックの中を漁っていたが、ようやく、「あった！」と明らかに、夏休みの宿題をしばらくどこかへやっていて、いざやろうとなったときに、見つからなくてしばらく探したらあった、という中学生の声に似ている。まあ、だいたい、見つかったときには前日の夜とかで結局終わらないんだが。
握りこぶしを天に向かって掲げたハルコの手には、日本の筆と、タッチパネル式の携帯が握られていた。
「小早川、とりあえず、これを持て」

ハルコが俺に一本の筆と、携帯を渡す。今から何をしようって言うんだ。
「何？」
俺が明らかに、コイツはアホじゃないのか、という目をしていたのがばれたのだろうか。かなり機嫌の悪い声で尋ねられてしまった。
「いや、これで何をすればいいのかと思って……」
「まだなんにも話してないんだから、とりあえず人の話は聞いてよね」
ああ、すんませんと何故か敬語かどうかは怪しいが、下手に出て謝ってしまった。
「で、これで何をすればいいんだ？」
俺は魔方陣でも描くのだろうか、描くとしたら、一体どんな魔法が出るのだろうかといろいろ妄想をしていた。超カッコイイ魔獣を召喚とかか？
「えっと、その筆で、艮（たつみ）（うしとら）、巽、坤（ひつじさるぬい）、乾の方角の壁に、『アレイスター死ね』って唱えながら、この模様を書くんだ」
ハルコはポケットから、札のようなものを取り出す。その札には、赤いペンで小さな〇とその上に、楕円形がのっていた。まるでペンダントのような形になっていた。
それにしても、方角の言い方がものすごく和風な感じだな……札とかもなんか和風だし。
「私は坤と、乾の方をやるから、お前は艮と巽をやれ」
そういうと、ハルコは踵を返して、真反対に走って行こうとしたが、俺がそれを腕を掴んで止めた。
「何？」
今度は機嫌が悪いというよりは驚いているような、そんな感じの声だった。俺は聞かなければならないことがある。
「艮と巽ってどっちだ？」
ハルコはしばらく目を丸くしていたが、目を細めて俺を睨みつけると、吐き捨てるようにこういった。

「なんのためにその携帯渡したと思ってるんだよ！待ち受けが干支の画像になってるだろう、それを見ればわかる。それに――」
「それに」
「古典の授業で習っただろ！馬鹿が！！」
怒られてしまった……まあ、確かに、古典でそういう方角は習ったような記憶がないことはないんだが、使う機会が少なかったから覚えてなかったんだ。あるよな、授業で習った記憶があるけど、どんなものだったか忘れたってこと。
ハルコはいつの間にかに真反対の方に走って行ってしまっている。俺もやらないとな。どんな魔法が出てくるのだろうか。
「どれどれ、どっちが艮かな」
独り言を呟きながら、携帯の画面を覗く。そういえば、俺はハルコと携帯のメールアドレスを交換してなかったな。今度交換してみるか。いや、ハルコのことだ、今まで教えなかったんだから今も教えなくていいだろとか言いそうだな。
なんだか、悔しくなったので、ちょっと弄ってみようと、携帯の画面をタッチする。
……だめだ。ロックされている。というか、女の子の携帯の中を覗こうとか最悪だな。俺。
自虐的になってしまったが、気をとりなおして、待受を見てみる。艮は北東の方角にあった。
とりあえず、走って、公園の一番端のほうに行く。絵はあまり似せなくてもいいんだろうか。やはり似せたほうがいいだろう。
「アレイスター死ね」か、憎き敵と言っても、あまり使いたい種類の言葉じゃないな……
言霊という考えも昔からあるわけだから、あまり意味が無いというわけでもないんだろうな。
「あ」
決して、ミスとかではない。間抜けにも、俺は大事なことを忘れていたんだ。それに気づいてまたしても間抜けな声を上げてしまっ

たんだ。
筆にインクが付いていない……
いや、墨というべきなんだろうか。とにかく、シャーペンでも書くために芯がいるように、筆にもインクがいるんだ。どうしようか。ハルコは今どうしてるんだろうか。後ろを見ていると、ハルコは黙々としゃがんで、筆を動かしている。
「どういうことだ？」
すると突然、筆の毛の方を触っていたてが、突然ぬるっとした感触を受けた。見ると、その手には、まだ乾いていない、赤いインクが付いていた。
さっきまではまったく、触れていても付かなかったはずなんだが、今は付いている。そういう魔法の筆だったりするんだろうか。
試しに壁に筆をつけてみる。面白いように描ける描ける。赤いインクがどんどん公園の壁を汚していく。ごめんなさい、清掃員の方々。
これだけ切羽詰っている状況なのに、こんなに面白いものがあるのか、とふざけまくっていた。そろそろ行動に移さないとな。下手すると、ハルコにまた怒鳴られかねない。
まあ、美術は得意だったからな。模写なんて余裕だ。
俺は壁にペンダントの模様を描こうとするが、まったく、インクがつかない。なんでだ？　さっきまで描けていたじゃないか。
――ここは艮の方向だな。魔を寄せ付けない方向でもある。
それで描けないっていうのか。良くわからんが、俺はどうすればいいんだ。
――お前は先に巽の方に行っとけ。そっちなら描けるはずだから。その間に俺が何とか描けるようにしておこう。
そうか、じゃあ俺は巽の方に行っておくよ。
――俺がここで何かしている間は、お前は俺の能力は使えない。気を付けろよ。
一体何にだ。

――どちらかの安倍にさ。
顔こそ見えないが、アイツはニヤリと笑っているかのようだった。

艮、巽、坤、乾（後書き）

すいません、書きダメたぶんが終わってしまいました。
本来は１万文字ほどで投稿したかったのですが、このような形で２０００~４０００時ほどで投稿することになりました。
次回から、１万文字ほどで投稿するために、１週間ほどの期間で投稿したいと想います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5549r/

onmyoninjaに出会うとき

2011年10月8日20時54分発行